秋茄子わさゞの數につけませて　（萬葉集）

嫁にはくれト棚にれくとも

右は都合に依り此部に掲げおきて道具の參考とす

添て辛くもする鹽加減苦勞なすびの漬工合ひ　六々亭金鱗

夫とゆるしの色香も深く一つちぎつた初茄子　鶯亭金升

◎夏痩。（六月）

夏痩ねがふ○――いのる○――嘆く○――果敢なむ○痩るまで思ふ

○痩るもられし○痩て凄い○痩てはづかし○痩てくやし○痩が眼に

つく○痩しごける○指輪がぬける○帶がゆるむ○外へ出ぬ○人にあ

はぬ○戀故やせる○戀しらで痩る○湯で知る○うつ〳〵と思ふ○氣

がしづむ○心ばそい○かよはい身○手弱女○仇もの○

鏡あがめて心も曇る夏痩ばかりトや無やつれ　仝

（夏痩）

萬葉

いしまろにわれもの思ひすと夏痩によしといふものぞむなぎとりめせ

夏やせも願ひのうちの一つかな　如瓦

◎夏帽子。麥藁――ト○（三夏を兼る）

買ひ冠り○天窓にかるい○照つけられる○風にとられる〳〵○吹きまは

される○あさく頂く○日を除る○日向あるき○心からかるい○情が

夏帽子○

とめる手だての麥藁帽子隱すを風めが持て行　柳やくめ

一重あがらも涼しい心笠にいたゞくなつ帽子　文のやかしく

◎夏行。夏深し○――の別○――に後○――の限○――過て○

――を追ふ○――の果○

雨がむすんだ此みあ月もはれぬうちから夏行　芳廼舍粹史

互ひにあつさの夏さへ過て秋に成やら氣に掛　上毛迷佛

むの部

◎虫干。　虫拂ひ○土用干○(六月)

衣服干す○書き物干す○見せられぬ○見せたい○文まで干す○ある
い虫干○にくい——○主につく虫○虫のついた穴○濡れ衣干す○耻
を曝す○風を通す○風を入れる○しめきる座敷○あける窓○こつそ
りと干す○大びらに干す○暑ッくるしい○暑さが增す○世間晴れ○
過し事懷ふ○昔を懷ふ○花見を念ふ○月見を念ふ○花か出た○文が
出た○口舌のたね○今はわらひの種○長持出す○簞笥から出す○本
箱をひろげる○蓼くふ虫○癪の——○腹の——○
虫でも附かと苦勞もすれば土用に干度主の腹　鷺亭金升
首尾の合圖のその文殼を晴て見せたる土用干　面白やつら雪

やつと見出した袂の文をぬしへ面當土用干し　横濱靜夢

うの部

◎卯の花。　花卯の木○卯花くだし(四五月の雨を言ふ)○
雪見卯○はつみ卯○垣見卯○(四月)

雪と見まがふ○人目の垣に眼だつ○湯豆腐の昔をおもふ○伏かさあ
つて居る○兎でもつくりたい○一枝闇の栞に折る○搔きわけて忍ぶ
○露をちからに咲く○倒れてゐる○犬くゝりから顏を出す○闇よも
紛はぬ○ぬれて通る○寒くおがめる○
闇の足もと照してくれてつもる逢瀨の雪見卯　詠み人しらず
こゝへ忍べとアノ卯花が闇の垣から顏を出す　鷺亭金升

（卯花）布さらす藏の里の數そへて卯花咲る大瀧の山（大瀧の山ハ近江なり）

◎童子鳥。（杜鵑の異名。はの部にあり）

◎うつ蟬。（せの部蟬の條にあり）

◎團扇。（三夏を兼る）

絹團扇○澁——○書——○奈良——○水——○羽——○唐——○團扇つかふ○——で叩く○——で招く○——へ乘る○——で押へる○——でかくす○——の風○——の垣根○——のかげ○——にはづかし○れ前は絹團扇○時を書——○はなしも奈良——○かくすも奈良——○お顔も水——○水がちる○風をやる○骨身にしみる○むすぶのかみ○うれしい書○主に似た書○反古にある○臺所でつかふ○座敷もぢりにつかふ○二階から落す○畳寢の顔へあてる○はづかしい顔かくす○うれしい口藏ふ○團扇へ指で書く○配り團扇○そろひの——○好みの——○出來合——○仕入の——○團扇車○骨○からみ

糸○

骨に成迄はあれぬ紙の斯なりや跡先みづ團扇　坂東秀調

一言いふては團扇で顔を隱す姿がしほらしい　八町堀南松

つゝむ笑顔も漏てる團扇風もたてあい丸い中　目高や

昔配つた名入りの團扇今ドや勝手の用にたつ　岨路里庵

顔をかくした團扇の骨のすき間漏てか立浮名　坂東佳調

◎鵜飼。

鴉遣ひ○——匠○——繩○——舟○

悲しい世わたり○淺猿しい心○面白い手○一すぢの心○遣ひわける○遣ひたてる○籌を焚く○もゆる思ひ○こゝろの闇○くらき業○呑でい吐く○つらい身○遣はれてつらい○浮きしづみ○しづむ胸○外にしれぬ胸○くるしき胸○さびしき心○つかるゝ身○翌日のつかれ○てらして欲い○長良の鵜飼ひ○玉川の——○鵜舟の身○たゞよふ

身○
蒼る鵜よりも苦しい胸は主の來る間が長良川　鶯亭金升

◎羅。　縮帷子の部見合すべし）

◎薄羽織。　夏羽織○（五月）

心にたゝむ○胸にたゝむ○懷中にする○情もうすい○緣もうすい○
詮方夏服○白い色○ふはりと着せる○そつとたゝむ○袖だゝみ○
心の底迄見えすき渡るぬしゝなさけが薄羽織　高知狂々史

◎梅干。　梅漬○―剝○（仝）

すゐの果○皺がよる○花を咲せた○庭に干す○色が出る○色が增す
○鹽氣もつ○損を梅干○
やつと世帶に染つた手先ぬしと一所に漬る梅　千葉奥のや忍

つらい勤めに張る梅干のはやく眞のみにし度　てん〳〵子
鶯あかせたむかしが戀し今は梅干見たやうな　（古　人）

◎打水。（六月）

門へ打つ○庭へうつ○往來へまく○ぬるゝ卿○露もつ木○埃押へる
○玉にあるゝ○打ばかたまる○雨はぬるゝ○しつぽり濡る○うつか
り浴せる○雫がたれる○飛だとばッ汁○しぶき掛る○敷石をぬらす
○心すゝしい○さつぱりした○落ちつく心○
ぬし故悠氣の身は燒石に水を打よなぢれッ度　喬亭羅升
打つなら打水疑ぐる言葉よその浮氣の飛つ汁　深川邊人

水うてや蟬も寢もぬるゝ穩　共角

のの部

切れたる夢はまことか蚤のあと　其角

◎殘る花。（よの部余花の條見合すべし）

◎蚤。（三夏を兼る）

蚤が喰ふ○一のあと○蚤とり眼○一に攻められる○一の夫婦○一に起される○一が飛び出す○一がせゝる○朝の蚤○床の一○疊の一○つぶす○火にくべる○寐ぐるし○蚤の多い泊り○飛びはねる主○はね者○ちくり〳〵と攻る○ちくりとつめる○こつそり喰ふ○喰ひちらす○蚤の行方○一の詮議○一の噂○一のはなし○一に困る○待つ夜のくるしみ○逢ふ夜の邪魔○

主より外にはゆるさぬ肌を憎や蚤めが喰に來　八町堀萬文堂

夢で千話して腕の痣がさめて瓜ほど蚤のあと　みどりや小松

背中合せを直した蚤とおもやうれしい疵の痕　金亭光升

線をフツツリ切れた夢のさめて嬉しい蚤の痕　桃園三國史

（香手鳥）

万葉　郭公鳴きたつ春の山邊には香手いださぬ人や住むらん

（俱伎羅）

さしのはにきゝふりわたる聲なれどなほ珍らしくなくくきら哉　遍昭

くの部

◎沓手鳥。（杜鵑の一名ほの部にあり）

◎勸農鳥。

◎俱伎羅。（ほとゝぎすの梵語ありといへり）

◎藥玉。　五月の玉○

胸の藥玉きれいにはらひ命のばして添た今日　盛亭當升

◎水鷄。　水札○（壓戸をたゝくが如し）

門をたゝく○たゝいて欺す○灯を袖にかくす○一杯水鷄○寐られぬ

苦勞○足音を聞いて當る○枕に頬杖○煙管を杖にする○寐がへりに夢さめる○もしやと起る○幾度か出て見る○三度目の辻占が當つた○啞を知りつゝ門へ出る○待つ矢先へ雨雲○出れば逃る○

（戸を叩く）紫式部渡殿に寐られし夜御堂關白道長公ひそかに忍びて戸を叩れしを式部聞居たれども開かず。夜明て道長公より遣はされし歌に

夜もすがら水鶏よりげふおく〳〵どまきの板戸を叩わびつるトありしを此かへしに式部

たゝあらしとばかり叩く水鶏故明けてはいかに悔からまし

枝折戸叩くもくる先觸とおもや嬉く聞く水雞　濱町　金亭

いつも欺した水雞も主の來夜は知か啼ぬ木戸　花の家　筆吉

門も叩かで逢たる今日の水雞を出拔畫の首尾　雪亭　銀升

折にや主まで水雞と思ひ出ずに悔い夜半も有　鶯亭　金升

（雲の峯）

六月になりぬとみえて大空にあやしき峯の雲のいろかな　衣笠内大臣

◎車百合。（ゆの部百合の條にあり）

◎黑百合。

◎薫衣香。（かの部掛香の條を見るべし）

◎雲の峯。（六月）

すつと立つ○怪しくたつ○今にもねれそう○いつしか消ぬ○あとは根のない○空にたつ○角だつ○けんまくが怖い○

たつた浮名の空おそろしく消ぬおもひの雲峯　鶯亭　金升

やの部

◎矢數。（その部大矢數の條）

◎大和撫子。（まの部撫子の條を見るべし）

まの部

◎甜瓜。（六月）　眞桑瓜○

大名に剝く○舌うちして喰ふ○種がおほい○種を眞桑○冷して置く○井に冷す○水瓶に入る○冷たい○

數へきれないおもひの種は主が來たび眞桑瓜　茶昆山人

けの部

◎罌粟の花。（四月）

ちり易い○三日坊主○ちりさうな色は見せぬ○心はかはらけ鉢○咲くまで娛しむ○ぬれて直浮名がちる○袖がさはつてもちる○言ふ事は罌粟畑○肝を――○はなしを――○口舌を――○艶しい口から毒さへ出と思や怖ろし芥子の花　生我苦坊

◎毛蟲。（六月）

きらはれる○人を刺す○針もつ心○燒る〻○花に仇する○嫌はれる○毛虫の仇名○やり手の毛虫○筆の――○おちる――○眼く垣根に落くる毛虫忍ぶくらうの胸を刺す　左亭主人〻

◎削り氷。（この部氷の條を見可し）

ふの部

◎佛生會。（四月八日）

浴佛○灌佛○龍華會○花御堂○甘水○佛の產湯○五香水○

生れる佛○しらぬが佛○人を甘茶○お釋迦さまもしらぬ○めでたく產湯○釋迦に說法○世に出る○世にあらはれる○指さす○天にも地にもたつた一人の主○知ぬが佛○戀もまだ產湯○ぬし故赤裸○あま茶の氣休め○指をさす○生れた思案○

添て見にゆく佛の產湯うまれかはつた心持ち　鶯亭金升

天にも地にもと思た主にそふて身に咲花御堂　仝

闇に首尾した彼雪見卿けふはほとけの花御堂　仝

◎不如歸。（ほとゝぎすの部）

◎深見艸。（牡丹の事なりはの部にあり）

◎富貴艸。

◎藤撫子。（あの部撫子の條にあり）

◎富士詣。（六月）

登りつめる○す走り○寒くある○寒い支度○はるかの道○浮氣を殿河○思ひし甲斐○日にやける○先達になる○一夜に出來た○留守がさびしい○――を思ふ○大勢でのぼる○濁らぬ心○へだて無き思ひ○かざらぬ形○白出立ち○旭をおがむ○二十山○芙蓉峯○鹽尻○互ひに命をかけ念佛でのぼりつめたる富士詣　詠み人しらず

おもふ一心あつさを外ふのぼる思ひの富士詣　仝

◎舟遊び。（すの部納涼の條を見るべし）

この部

◎更衣。（四月）

戀ごろもを脱かへる○かくし妻○心が晴る○生れかはつた樣だ○晴衣も脱かへる○袖で顔かはふ○後姿を見てもらふ○はれての更衣○うれしく――○

花と見られた勤をひいて眉も青葉のころも更　西京霜亭曉升

◎木下闇　下闇○（夏木立。若葉の部を見る可し）

花の頃から名にたつ中は後ぐらさの木下やみ　詠み人しらず

◎戀し鳥。（郭公の異名あり。はの部を見るべし）

（戀し鳥）死出の山越えてきつらん時鳥戀しき人のうへかたらなん

◎今年竹。若竹○（五月）

窓の若竹○垣の――○のびる日○育てられる○實をむすぶ○皮を落す○節もこまかに○今年から育つ○今年の色○根がしまる○根を堅く○はびこる○廣がる○這て行く○のびて行く○天をつく程○軒にさはる○包筍のむかし○土をはなれる○顔にさはる○肩をたゝく○袖ひく○垣にもたれる○色が濃なる○雨からのびる○ぬれた曉○見ちがへた○植ゑたい處○梅とおらぶ○

わけも或夜の雨からのびて色の濃ある今年竹　千亭虎升

年も互ひにまだ若竹の細くながくとおもふ中　湖亭蓮升

◎こゝろ太。（ところてんなり。この部にあり）

◎氷水。　氷賣○氷や○夏氷○削り氷○雪の花（六月）

心がとける○腹へしみ渡る○腹まで透きとうる○角がある○消て仕舞ひ舌○水にする喧嘩○けづる○割る○たゝく○卸し賣り○切り賣り○天然の氷○人造の氷○くらい處から出る○日向をいとふ○とけた樣でも冷たい心主はあさけが夏ごはり　濱町　光升
凝かたまつたる互ひの思解て嬉しいこはり水　長崎　鴎丹
うまい手管でアイスクリーム誰に遠慮夏菓子　風雷坊　雨雪

えの部

◎えびを藥。（共に芍藥の異名しの部にあり）
◎えびを草。
◎烏帽子魚。（鰹の事。かの部にあり）

あの部

◎枝蛙。（あの部雨蛙の條にあり）
◎袷。（更衣の條を見合すべし）（四月）
◎網鳥。（はとゝぎすの異名あり。はの部）
◎青簾。青葉の簾○翡翠の―○（四月）

人目をいとふ○小隱れする○外からはしれぬ○ぬしに釣るゝ○掲げて見る○外へもるゝ○搖く○移り香もるゝ○煙草のけむりが出る○風がのぞく○裾が出る○垣間見○立ちぎゝ○編む○吹きまくる○吹きあげる○ぬしに青簾○何うして――○いつ――○今日――○舟べ

かける○二階へかける○軒へつる○簾から呼ぶ○―へ文をさし込む○―の透から手まねぎ○―越しの咳○―へ忍ぶ風○―へあたる雨○人目忍びし簾のかげは風も遠慮でそつと吹く　花の舎枝折

かくす心の此すゞしさも外トや知無青すだれ　廣島　惣解

◎雨蛙。　枝蛙○　（仝）

雨にあく○枝にあく○枝住居○まだ青い○忍び啼き○かくれて啼く○深くひそむ○襟もとで啼く○ぬれる覺悟○ふられる積○振れ乍らも柳にうけてぬしをたよりの枝蛙　横濱　屋氣樓

◎扇。　かわはり○（三夏を兼る）

隠れて扇○ぬしに扇○忍び―○骨を折る○戀風○風のたより○扇の垣根○此處が要○扇で顔かくす○―で打ちたゝく○―を鳴す○扇で招く○主に扇の風をやる○うちに親骨○左様とも白扇○踊扇○京扇○萬歳扇○女扇○男もち○女持ち○匂ひをかくす○影畫見る○紅をかくす○鏡がつく○はなれぬ御影堂○地紙にある○折もい〻○扇の的○―の謎○―の杖○―の折檻○―の手振○

顔をかくした扇も今宵ならんで嬉しい盞の上　目高也　錦魚

胸もひらいて涼しい思ひ主に扇の今日の首尾　光婆　軟史

戀のかゆめに心の地紙ぬしにいのちを掛け扇　住吉亭小豐

わかれ〳〵に成ては居れど末は扇とある地がみ　侃々坊

しのび扇の垣もる浮名すだく野面の虫のやう　鷺亭金升

◎汗。　汗押へ○―手拭ひ○　（仝）

撥の汗○握る手の―○襟の―○顔の―○枕の―○汗をつゝむ○―をかくす○―に濡る○―が邪魔する○―が取り持つ○―の玉○―の匂

ひ○—の衣○—の身体○暑さこらえし汗○はづかしさの汗○くやしさの汗○つらさの汗○一風呂這入る○汗を流す○汗ぴつしより○汗どつふり○汗が出た○—が眼に入る○—がにドむ○—が染み出す○—のあと○—の色○拭ても〳〵出る○汗性○居る膝の汗○汗ぢめの粉○打ち粉○ハンケチ○半手拭ひ○手て拭く○袖でふく○顔冷す○逆上る○冷汗○あぶら汗○

思はず今宵はしつぽり逢て癪の塊あせで解く　浮世博士

汗の座敷に涼しい風がぬしを向へつれて行く　寅の山人

◎洗ひ鯉。（六月）

あへばうれしく身體も縮み胸も奇麗に洗ひ鯉　伊勢喇々子

◎菖蒲。（菖蒲酒○——湯○——の枕○——の案○——の髮○——引く○——人形○——蓍○——の占○——浴衣○（はの部花菖蒲の部を見る可し菖蒲ゐ見立題にて當時に合ねば其心して詠むべし）

（菖蒲の歌）堀川院の時菖蒲を奉る者の書に

進上水邊菖蒲千年五月五日　大江爲武

トあり人解に苦しむ師頼卿讀むを得たり

進り上る水邊の菖蒲卿千年の五月いつか大江爲武

感ありて兩人の才を賞め玉ふ

軒のあやめの色にも知る青い世帶のはつ節句　濱町邊人

軒の菖蒲もさびしく招く男の節句に來ない主　小田原霞舟

主に似てゐる此子の顔を軒の菖蒲が指をさす　鶯亭金升

浮氣で呑だるむかしに換て今日ゐ祝て菖蒲酒　〃　山人

◎青梅。　實梅○（五月）

ふと落る○種が堅まる○青い身○礫にうつ○實にある話○すいもの好み○かぢる○鹽つけて喰ふ○そつと落す○垣外からおとす○うれしい實梅○

（渇を止む）曹操兵を行る時三軍道を失ふて大いに渇す操曰前に梅林ありて子を結べり早く行て喰へといふ士卒聞くより口に唾を生ト渇きをとめたりとぞ

夫と向へば口青梅の言たい種さへかたまらぬ　袖のや江而史

◎青田

限りなき眺め○二階からみる○吹れてゆく○涙が立つ○主に青田○どうぞ——○實入りまつ○すこしの間○鳥が立つ○近くて遠い○夏の田面のたゝあを〳〵と思やはて無此れもひ　實山人

たらぬ心も青田の面の風にまかせて居る苦勞　芳の舍はあ子

◎暑（三夏を兼る）

此身やく樣な噂ゝ消して晴れて暑を避にゆく　黄金廼升成

もゆる思ひの暑の胸にしのぎ切あいての苦勞　仝

つのる暑が我身をせめて痩るばかりに思今日　仝

◎秋近し。秋隣○

◎秋を待。

添るゝ秋○すてらるゝ——○すゝしい胸も○秋が近いと○——がくると○——が來さうな○待ぬ秋さへ○近よる——○隣の——○

いつか迷ひの雲さへ晴て丸く月見る秋を待つ　荻廼宇和風

秋が隣にきてゐるつらさ何も思案が夏のはて　甲斐白梅

さの部

◎櫻の實。（はの部葉櫻の條見るべし）

◎五月の玉。（くの部藥玉の條にあり）

◎五月雨。　さみだれ○梅雨○入梅○五月闇○晴間が無い思ひ○まだ乾ぬ濡衣○日のお顔を見ぬ○隱れてぬるゝ○陰氣な胸のうち○降りつゞく涙○干ぬ袖○互ひに深入梅○帶の星○文のしみ○怨みも濕氣る○軒端見て日をくらす○くらい座敷○いつ明る入梅○待つも長入梅○根のつく松○雨垂れの音が耳につく○獨ふさぐ○むねの闇○思はせぶりな時あかり○はれでは曇る○物凄い空○今日も其儘くるゝ○

（入梅の井）攝津國丹生庄栗花落左衛門邸の內に井あり常は水無し入梅に入て水涌出るとぞ　柳家蹴鞠

解た雪の夜遂おもひ出し濕りがちなる入梅頃　攝津顏見亭

はれて朝日をいつ見だらう曇勝なる入梅の空　玉の古史

胸のはれ間もない五月雨の或夜ひそかに主顏

◎早苗。　早少女○（たの部田植の條にあり）

◎さらし井。（いの部井戸替の條にあり）

きの部

◎木芍藥。（牡丹の異名。はの部）

◎剖葦鳥。　鼓剖○蘆原雀○蘆鷺○(四月)

喧しい○絶えず囀る○浮名が騒がし○仰山らしい○よしあし分る○
噂がぎやう〳〵し○話がぎやう〳〵し○耳を貫く○逆上かへる○い
〻聲○
あまゝ逢ふのもよし蘆原の何うも噂が行々子　熱海　月の家

◎胡瓜。　揉瓜○(五月)

はなれぬ胡瓜○い〻胡瓜○かはらぬ胡瓜○何うする胡瓜○困つた胡
瓜○いぼ〳〵立つ○氣を揉む○青くさい○茶漬もうれし○朝の酒○
畑の胡瓜○舟にのる○へボ胡瓜○生づけ○かくやに刻む○
ひとりくよ〳〵氣を揉瓜の酸物好みもこゝろ柄　松の家鶴子

ゆの部

◎雪見艸。(卯の花の異名。うの部にあり)

◎鴨足艸。(四月)

あはび貝に咲く○古土瓶に咲く○軒につらる〻○いつしか咲く○淋
しき身の上○何處へか虎耳艸○かくれて雪の下○合點が雪の下○
又もあはびのかひ無住居軒にしはる〻虎耳艸　青山　點々

◎百合。　姫――○鬼――○袂――○黒――○博多――
○車――○透――○鹿の子――○(仝)

俯向く○うな垂れる○あよ〳〵と咲く○倚りかゝる○根に味もつ○
下見てくらす○搗母の鬼百合○ひく袂――○爪あとが鹿の子――○

(雪見艸)
おとりけりわか袖
ぬれし雪見艸名に
こう雪よつゝけふ
れゝは

露にわかれて俯向く百合も濡た其夜の有ば社　金衣公子

◎浴衣。

しばし別れに鳴海の浴衣未練な涙のたま絞り　大垣頓々猫史

◎夕立。　白雨○よだち○錦雨○凍雨○夏の雨○

野路の夕立○堤の——○町の——○廓の——○舟の——○夕立に追る丶○——に出逢ふ○——でわかれる○——かこつ○——のお蔭○——の引き合せ○なだる丶人○散人○さはぐ人○見る間にはる丶怨み○外でぬれる○うはさ夕立○異見——○それと——○何を——○來ると——○嘘と白雨○來ぬと——○傘やどりで逢ふ○相傘をなぶらる丶○傘借りに來て泊る○いつしか晴て仕舞浮名○ぬれ衣着て歸る○ところ〳〵でぬれる○思ひ〳〵の形○尻を端折てきれ支度○ぬ

れ度言葉○傘をかくして止る○屋根舟の戸をしめる○帶も手拭ひを冠る○素足にある○泥まぶれ○

（雨乞ひ）能因法師三島明神に祈られし歌

あまの川苗代水にせきくだせ天くだります神あらば神

小野小町が祈りし歌

あめにます神も見まさば立さはき天の川戸の樋口開給

晋子其角三園の社にて祈し發句

夕立や田をみめぐりのかみあらば

（小町が雨乞の歌とて理りや日の本あらば照もせめ然とて

は又あめが下とは言狂歌を世に言ひ傳へたり右は慶長

の狂歌集にありて小町が歌は前に記せしを實とす。然ど趣

向に依ては俗にしたがふて此ざれ歌を用ゐるも此道にて

はさしつかへあし）

（麥を漂す）後漢高鳳字は文通書を讀を好む或夏の日麥を曝し其妻鷄をふせぐ爲に竿を鳳に持せて守らせて置しに鳳片手には竿片手に書を持て麥の番をしながら讀いたりしが大雨俄に降來り麥が流れたれど少しも知ずに書を讀で居たりしといふ

（雨大臣）太政大臣師長勅を奉ドて琵琶を日吉社に彈ド雨を祈る忽ち雨下る。八雨大臣といふ

歸る間際にふる白雨があらひ流した胸のうさ　金亭光升

歸るりぶりと見て夕立もとめて呉たる頼母さ　三升や團子

未練のこさぬ手際を見せて濡て別るゝ夏の雨　仙臺梅のや

◎夕顔。（六月）

うはさ夕顔○それと――○しほれて暮る○露ほども○黄昏さびし○あめさを外に○夕顔の宿○夕化粧○垣にもたれる○添へ竹による○末は實にある○

晝はしほれて居夕顔のつゆを力にひらくむね　秋亭主人

めの部

◎冥途の鳥。（ほの部ほとゝぎすの條にあり）

みの部

◎三月過鳥。（仝）

（三月過鳥）
さみたれの雲間をないて過るなりおもはす顔の三月過鳥　大伴黑主

◎短夜。明安し○夏の夜○（三夏を兼る）

（短夜）
夏の夜のふすかとすれば時鳥なく一聲に明るしのゝめ　貫之

話も短夜○繰も――○夢も――○氣が――○首尾も――○腐鷄が啼く○一聲もらす鳥○移り香も惜い○袖引き酒○夢も結ばぬ○殘る口説○鐘に急るゝ○鳥に裂れる首尾○間も泣き別れ○障子に殘る人影○枕に足ぬ夢○惜しい別れ○のぞく連子○そつと出格子○またの首尾をちぎる○離れがたない中○ひき止る帶○帶が泣く○ふり切る袂○明星がおちる○肩をうつ○案ドくらす○泣明し○眼ぶたのはれ○眼のうるみ○うれしい雨○まだ干ぬ汗○

たらぬ夢路に短夜うらむ君の顔見ぬ折とても　和歌の家浦波

心の底まで聞えぬうちに逢た一夜が明やすい　涼亭旭升

口舌短夜はや明そめて消もる話に消すともし　土佐潛水舍

はあしする間も彼夏の夜の短い針めが明報す　西京琴聲

◎水ずまし。（五月）

（田長）いくばくの田をつくればか時鳥しての田長を朝なゝくよぶ　敏行

（暖鳥）名にものみ山里になくしづ鳥は卯花ばかり都とやおもふ

浮てさはぐ○す早い○水に輪をかく○つむトの樣○世間を水すまし○お顔も――――○苦勞も見ずすまし○

浮て居乍ら身は濁り江に主故世間も水すまし　成るや女夫

しの部

◎新樹。（わの部若葉の條にあり）

◎四出の田長。

◎蜀魂。（ほとゝぎすの異名はの部にあり）

◎賤鳥。

◎芍藥。えびす卿○貌好卿○えびす藥○（四月）

おてる芍藥○主の――○さはる――○色よき返事○ひらく胸○つぼみの戀○こひしい顔好卿○うれしい――――○

しやくと言名の開くと言も主が見たる顔好卿　珍々堂

かざらぬ心で咲く芍藥の花に迷ふた蝶もある　大垣柳翠狂史

◎新茶。　古茶○今年茶○(三夏を兼る)

(古茶は新茶に對していふ名あり)

水を撰む○入れて樂しむ○出端たのしむ○薄いがよい○濃かい〻○あまく見られる○澁〳〵ながら○い〻色に出る○うれしく呑む○ひとり挽く○あとを挽茶○はなれは煎茶○茶碗も對○うれしき色○い〻薫り○山吹の色○一じゝく○浮されて寢ぬ○赤くある○出し殼匂ふ○

皆勞新茶も色よく出來て先の見込みが立香り　神宮邊人

寞やすみにのむ新茶さへ添て間のあい色に出る　巴港新柳生

◎紙帳。(かの部蚊帳の條にあり)

◎葩菜。　和名沼奈波○・(仝)

池の葩菜○――の汁○ぬらりくらりと○箸にもかゝらぬ○泥水そだち○水にうく○古池○辷る○籠の葩菜○皿の――○

つかまへ處の無言譯が何時沼奈波のぬら〳〵と　詠み人しらず

◎清水。

苔清水○岩間の――○むすぶ――○わく――○太る――○あがる〻――○くらうを――○浮氣を――○立ち寄る○立ちどまる○心を汲む○結ぶえにし○岩にせかる〻○わかれて流る〻○末い濁る○湧くうちみ○つめたい心○心の底が見える○せかる〻思ひ○

（苔清水）西行法師吉野の山奥に住はれし折庵室の前に清水ありしを
とく〳〵とおつる岩間の苔清水汲み干すはぢも無き住居かな
此歌ありしよりとく〳〵の清水とて名高し

露とく〳〵こゝろ見に浮世すゝかばや　はせを
凍といて筆にくみ干す清水かな　仝

少しや心を汲みそめものと思あがらも岩清水　眞棒散史
口にや岩間にたゝ湧く清水汲で呉あい怨み種　函館萍亭伴水
あけて夫とは岩間の清水汲でくれるを待ヨリ　豫州雅广史

ひの部

◎單物（袷帷子などに照して考ふべし）

◎日傘。　青傘○（三夏を兼る）

抱へ日傘○干す——○くる——○そふ——○ひらく——○さす——
○顔かくす○傾ける○すれ違ひ○顔見合せる○顔に夕やけ○雨やど
りから知人にある○晴て青傘○人をはゞき○ひらく胸○すぼめる心
○風にさからふ○鳥かげさす○顔にうつる○てらされる○廻す○か
ゝへる○
子供に買たる其昔日傘に昔の姿がかいてある　寶山人

◎冷麥。　湯麥○（仝）

鉢の冷麥○冷し麥○冷される○冷たい腹○氣をひやす○肝ひやす○
すゝしい心○
逢ぬ夜ひとりで喰冷麥に胸の炎を消させたい　芝初心生

◎蟾蜍。（仝）

逼ひ出す○面へ水○腹がふくれる○眞面目な顔○闇でおどす○飛びつく○蚊を呑む○蚯蚓のむ○手をつく○

迎に出たよに見るも邪推送小庭のひきがへる　金升

◎晝寐。（仝）

一間に晝寐○二階に——○様に——○歸したあとの——○待ち草臥て——○晝寐の夢○——の疲れ○——の癖○水屋に起される○いたづらされる○寐言いふ○顔に本あてる○文でかくす○臂まくら○膝まくら○本をまくら○起てはづかし○寐貌見らるゝ○うつゝに聞く○

（南柯夢）淳于棼夢に槐安國に入り南柯郡の太守となると見て覺たり依りて傍ある古き槐の木を尋しに槐安國は其穴にて枝の上ある穴い南柯郡にてありし云々

（華胥に遊ぶ）黄帝夢に華胥氏の國に遊ぶ夫より二十八年にして天下治り幾ど夢に見し華胥の國の如しと

（朽木）宰予晝寐したるを孔子見て朽たる木は彫物が出來ぬと曰るゝ

（邯鄲）盧生といふ者榮華の夢を見たり覺れば五十年とおもひしも僅に粟の飯を焚間でありしといふ

（蝶となる）莊周夢に蝶となりて遊ぶ覺る時ゝ俄然と周なり云々

晝寐にたまゝ遇てる夢を氣障な迎ひに起れた　西京春齋

蟬を鳥どうつゝで聞た晝寐に首尾仕た夢を見て　長崎臨升

◎姫百合。（ゆの部百合の條にあり）

◎火蛾。（六月）

はなしを消す○身をこがす○飛で火に入る○火にからまる○胸の火○悩氣のほむら○闇にする○我から焦る〻○火を取にくる○待つ夜の燈火○石燈籠の火○提灯の火○まつはる○取りつく○すがる○にくい火取虫○粹あ――――○こひしい――――○邪推あ――――○

飛で火に入る虫ではあいが今は主故この苦界　　麟多太郎

眞のはあしを消すとい憎い實に分ぬひとり虫　　鶯家梅升

◎鼓子花。（仝）

露のいのち○ぬれて色ます○てらされる○這ひまとふ○つきまとふ○手蔓がはしい○しはる〻○一雨いのる○

露のちぎりにいつひる貌の袖の濡衣乾きかね　　詠み人しらず

てらされ乍らも身は蓋顔の露の契むでゝろ待　　仝

せの部

◎蝉。初蝉○空蝉○（五月）

啼きたてる○木にすがる○松をたよる○もゆる思ひ○啼きさはぐ○空蝉のもぬけ○もぬけの布團○主はもぬけ○とられる油蝉○惜しいをしい○みん〳〵と啼く○つく〳〵啼く○蝉のしぐれ○一の諸聲○確な證據をおさへたからい決て逃い蝉ぶくろ　　紅葉舍主人

◎揉瓜。（きの部胡瓜の條にあり）

君をおくりて後あく蟬の聲に思もますあつさ　臨升

あいて居よりたゞ空蟬の扱てゆきたい主の側　霞蝶園春齋

夜の首尾をば知ずに蟬が盡日惜いと啼く憎さ　小車うし彦

情も夏の日野中の一木てがるゝ心のあぶら蟬　うれしく亭

◎石竹。（あの部撫子の條にあり）

◎石菖。

石菖へくる風○――の職ぎ○――の鉢○――に水やる○石をあしらふ○水も漏さぬ○水につかる○薬のちから○年々殖える○

岩を便りゐ石菖さへ離にゐ辛防の色をます　白山人

こめた念力先今と眉き岩に根をはるアノ石菖　千薬笑顔

すの部

◎納涼。　舟あそび○納涼舟○――臺○（六月）

◎すゞし。（三夏を兼る）

納涼の誘引ひ○――の戻り○――の知り合ひ○――かこつけ○涼しい座敷○すゞしい形○すゞしい様○すゞしい川岸○髪が舞ふ○鼻紙が飛ぶ○涼しさを建てめて逢ふ○聲すゝし○心――○浮てゐる納涼舟○背中合せに腰かける○文を見られる○星が飛だのを見て逃る○怖いはなしをされて歸りを案ずる○後からたゝく肩○湯の戻りに引き止められる○橋まで行く○

わかれ〳〵に出てする首尾の松に落あふ納涼舟　櫨の屋芭八

此人歌
舟なればこそ
すゞみ哉
其角

はおしする間も氣は落付ぬ人目兼ての納涼臺　深川清軒水

暑い同士は氣も合惚れの胸をうち明夕すゝみ　函館芝蘭

義理とまことの兩國かけて主と橋間の納涼舟　芳町八千代

親や人目にや納涼と見せて主の歸を寐ずに待　萬文堂

かゝる苦勞を紛らす納涼嬉しや落合ふ橋の上　湯島喞亭

◎鮓。（はの部早鮓の條を見るべし）

◎末摘花。（への部紅の花の條にあり）

追加

◎紫羅傘。（四月）

てらされ乍ら咲一八のぬれる日を待屋根上　金升

◎花柚。（仝）

つゝむ香もいつしか漏て咲せる花柚の八の口　仝

◎糒。乾飯○（五月）

冷されてもお前の胸をきいて乾し飯此ねがひ　仝

◎虎が雨。（五月廿八日）

（虎が雨）俗いふ此日大磯の虎、替我祐成に別る涙變じて雨となると云々

嫉む心で降かと思や怖いあふ夜のとらが雨　仝

◎螳螂生。（五月）

此頃うまれて來た螳螂に浮氣な緣をば斷し度　仝

◎虎の尾艸。（六月）

忍ぶ怖さに虎の尾蚓をふむも可笑しい主の庭　仝

◎粽　（五月）

軒の雀の千代ふるえにしむすびこめてよ笹粽　仝

◎林檎。（六月）

青い赤いの心をこめてあれぬ林檎のちぎり初　仝

◎翡翠。（三夏を兼る）

色で迷はに翡翠でさへ魚の眼からは仇がたき　仝

◎河骨。　萍蓬◎（五月）

浮いて世わたる彼河骨も莖に實意ある花ひとつ　仝

◎蚊帳釣蚓。（仝）

子供が蚊帳とば釣せた蚓に雷の昔を思ひ出す　仝

◎川狩。（六月）

底の底までくむ川狩のふかき思ひをかけた網　仝

◎玉巻葛。　——芭蕉◎（四月）

たねを巻葉にうき葛かづら君に逢日も玉の如　仝

◎竹植る。　竹迷日◎竹醉日◎（五月十三日）

竹も迷と旨日に植りやおもふふしぐ色がまず　仝

◎夏座敷。

あけて話たこゝろの誠ほかにたよりは夏座敷　金亭光升

けむい蚊遣も少しの我慢あとは住よい夏座敷　色氣内史

◎夏籠。　—百日○(三夏を兼る)

外出いやさにする夏籠りサ悟り開いた此世帶　金升

◎蕗。　(四月)

怖い姑も今では昔しらくな小ぐちがあき田蕗　仝

◎風爐茶。　(三夏を兼る)

亭主にありたさ樂しむ手前苦勞に體も毀風呂　仝

◎腐艸爲螢。

添ぬと其氣を腐らす艸の螢と成ても身を焦す　赤坂愛亭

腐つた草さへほたるとなれば生れ替て主の側　濱町金亭

◎風蘭。　(六月)　仝

軒の風鬪ア見やしやんせ釣乍らも花がさく　(古人)

◎苔の花。　(五月)

かたい石にもさく苔の花人のこゝろは知ぬ物　詠み人しらず

◎炎天。

ぬれに行のかこの炎天に家を外よりやける胸　金升

◎手鞠花。　(四月)

うそを突ひたり實の無返事人を欺かす手鞠花　仝

◎青鷺。　(仝)

そつと青鷺忍んでおいでどうぞ二の足踏ぬ樣　仝

◎青山椒。　(仝)

とめて實生への朝倉山椒花はあくとも今少し　仝

◎紫陽花。（五月）

それと定めぬ主や紫陽花のいつも約束變る色　仝

◎青嵐。（六月）

たまにや口舌もられしい世帶晴た空吹青嵐　仝

◎青番椒。（仝）

青いうちから心をかけて色づく秋待つ唐辛　仝

◎青鬼灯。（仝）

虫が附かと畑の鬼灯青いうちから氣に掛る　仝

◎早松茸。（五月）

おもふ一雨かくせぬ顏を見れて耻し早松茸　仝

◎小蠅聲神。（六月）

小蠅あす神すがたも在ば主を納涼に連出せ　仝

◎桐の花。（四月）

嫁の箪笥と申談言た桐に其名の花も咲く　仝

◎越瓜。　稍瓜○（五月）

雷干しにとする越瓜も切るを忌でる新世帶　仝

◎蛭。（四月）

世辭を振る鹽返事もしかね顏を赤めて縮む蛭　好粹子

◎枇杷。（五月）

（評）
うき艸や
今日はあちらの
岸に咲
乙由

君にこがれてやつれし實枇杷いつも思の種斗　松羅園合中

◎百日紅。　さるすべり○（六月）

赤い心を知ぬがくやし百日紅でも通はうに　黄鳥家

◎藻の花。

◎萍の花。（五月）

上邊ぢや萍切ると見せて心の底では根を堅く　仝

浮て藻にさく花よりつらい花を飾りの流の身　仝

◎葭戸。

首尾も葭戸を今宵はあけて離座敷で月を待つ　河内樓豐原

◎若荷箏。（六月）

女房にするとは若荷の話何うか忘れず末長く　實田廼里人

（七月）

七夕のあふ夜の空のかげ見えて雲ならべたる文ひろげ月　有家

鵲のよりはのはしもこゝろせよたなばた月のころ待えたり　家隆

たなばたの契の色にたぐへてや名をえし月もなみなへし月　顕昭

（八月）

萩の葉も露ふきみだす音なりや身にしみうめし秋風の月　定家

名にしおはゞ秋の中の空はれて光ことなる月を見るかな　長明

（九月）

いく度かおなじ枕の雁覚月秋にはたへぬ長き夜すがら　家隆

さびしさは鳴たつ暮の露しげく袖うちはらふ小田苅の月　顕昭

◎秋

七月

立秋○新秋○孟秋○初秋○處暑○文月○機棚月○女郎月○

涼月○盆秋○相月○桐秋○蘭月○蘭秋○肇秋○親月○餞月○

八月

葉月○南呂○白露○秋分○仲秋○壯月○桂月○中律○難月○秋風月○月見月○雁來月○

九月

無射○寒露○霜降○季秋○紅樹○玄月○長月○素秋○菊月○晩秋○梢の秋○紅葉月○寢覺月○小田苅月○色どる月○

いの部

○稲妻　稲つるみ○もゝかゝり○（七月）

眼を射る○忽ち消る○ハッと驚く○消るおもひ○眼の電火○何處へ稲妻○闇をてらす○くらき夜○出合ひがしら○稲妻が走り込む○——に逃る○——に後られる○——に障子の穴を見つける○——が山を見せる○——が水をはしる○——が外出をとめる○——が畫にする○はなしが消る○てらされる○思案が消る○消てあとなき○鍵を見る○

それと言間にもう稲光り盡ぬ話もきゆるそら　實田廼里人

今宵逢うといふ雲行をしらせる眼元の稲光り　仝

○糸萩。（はの部萩の條にあり）（仝）

○蟲。（六月）

◎蝗。　（仝）

◎稲春虫。（仝）

飛び歩行く○稲にすがる○ついて廻る○押へちるゝ○狩るゝ○足へ
飛びつく○踏るゝ○足音にかくるゝ○焼き鍋○田の―○
いつも三日と家には鍋ぬしは浮氣で飛び歩行　詠み人しらず
好たからには嫌はれやうと附て居氣の稲の虫　仝

◎芋虫。（仝）

ごろ〳〵寐る○はたらきが無い○昨夜のつかれ○待夜の氣勞れ○子
供あそびの○芋虫の樣○――にをどろく○――怖がる○
（芋虫ころ〳〵）瓢蔓ぽっくりこ滯へ手をかけてつあがりつくばひな
がらぐる〳〵廻る子供遊びあり其廻る時口〳〵にいふ

蝶になる氣で居る芋虫の時を待のか眠るやう　仝

◎竈馬。（仝）

（この部蟋蟀の條あり）

◎糸芒。（すの部芒の條にあり）

◎居待月。（十八日なりつの部月の條見るべし）

◎芋。

粒―○唐の―○青―○螺―○甘藷○（三秋を兼）

まことと有限はかつた升ゐ添た笑貌のこばれ芋　仝
洗ひ立すりや出て來浮氣いつ迄妾をはかり芋　保多留

◎稲の花。（富艸の花とも言ふ○（七月）

◎稲。

―刈○―扱○―舟○―筵○（三秋を兼る）

（稲の花）
ゆふぐれはみやまたろしに我家の門田の稲の花の涙よ
後久我内大臣

（稲舟）
古今　最上川のぼればくだる稲舟のいなには非ず此月ばかり

（稲筵）
萬葉　玉ぼこの道行つかれ稲筵しきても人をみるよしもがな
人丸

秋の田のかり寐の床の稲筵月やどれどもしける露かな
定雅

（鰯）
宮中にて御祭或ひは祭といふ

稲小屋○一水○一掛○一束○一干○（八月）
實り稲○孕み一○小田の一○門田の一○磯田の一○山田の一○實の入る話○穂に穂がさく○目出度取り入れ○待てゐた今日○うれしく實る○植た甲斐○黄金花さく○稲舟のいな○かぶり振る○寐てゐる○伏し重なる○倒れる○高枕○はてが見限ぬ○見渡す限り○早稲○晩稲○中稲○

今ゝや浮名にはにはが咲て隠し切あい實り稲　三遊亭新橋
心ゆたかに實をもつ今日も斯ありや當の稲花　詠み人しらず
手に手つくした其甲斐ありて今は斯した實稲　寶廼山人

◎鰯ひく。　裂き鮹○より鰯○鰯賣○（三秋を兼る）

◎鰯雲。　（仝）

油が乗る○ひく袖○ひく袂○綱の目を漏る○何とも鰯○うち寄る思

（十六夜月）
古今　君やこん我やゆかんのいさよいに槙の板月もさゝす寐にけり

○寄る心○中を裂く○新しい○紫の名○心を合せてひく○ひき揚る
○大漁○鰯を見る○沖からよせる○銚子の濱○九十九里○傍へよる
○夕河岸の荷○格子から出す皿○足がはやい○威勢がいゝ○まけぬ
勢ひ○鹽燒き○三杯酢○ぬた○反りかへる○汐がある○盤臺に光る
○水道の水○

綱の目がどの多いも外にぬしの門邊べより鰯　詠み人しらす
燒て見る氣がまだ新しい中とはたから裂き鰯　仝
途切れ〳〵の首尾まつ矢先空にまで見る鰯雲　仝

◎十六夜月。　既望○（八月十六日）
（いさよふとは立ちやすらふ意あり）
しばしの間○すこしのうち○十六夜ふうち○いさよふ間○くもる心
○雲にいさよふ○闇にいさよふ○時はいさよひ○

（稲負鳥）

古今

我門にいな負鳥の鳴なへにけさ吹く風に戸はきにけり

○

あふ事を稲負鳥の数へずは人は繼路にまどはざらまし

（色鳥）

さらに又わたるもかなし山路ゆく秋や限りの色鳥の聲

政　爲

（いなて艸）

長月の九日にさくいなて艸花は八重にて万代ぞへん

此間にくるあらいざよひ月よ晴た氣で逢空模樣　仝

◎稲負鳥。（鶺鴒の事ありせの部）

◎色鳥。（秋わたる小鳥をいふ渡り鳥の條照し見可し）

◎伊須加鳥。（八月）

背の喰ひちがひ○青い嘴○思案がちがふ○先からちがふ○

主は伊須加の口前上手その癖心は喰ひちがひ　仝

◎隱君子。（菊の異名きの部にあり）

◎いなて艸。（仝）

◎毬栗。（くの部栗の條にあり）

（色變ぬ松）

色かへぬはこやの山の峯の松君をう千代の友と見るらん

入道前内大臣

（萩の錦）

いとゞまたおもてぞまさる秋萩の花の錦の露のたてぬき

法皇御製

◎色不變松。（九月）

變らぬ操○主にい色かへぬ○相生の松○三保の一○くねらぬ心○すねた枝○色がまず○年經し盟ひ○をあしき心○かざらぬ色○

つとめして居る深山の松も君の外には色替ぬ　寶廼山人

はの部

◎初秋。

人目包んで逢てくれた嫌もわかれの今朝の秋　根室英史庵

◎萩。

一の錦○一の戸○一殿○

もとあらの萩○鹿鳴艸○古枝艸○糸萩○小一○さ

いはれの丶萩の朝露わけゆけば懸せし袖のこゝち社すれ

いれ―○（七月）

やつる丶朝の萩○しはれる雨の―○線の糸―○出來た小―○情の露○みだる丶心○寐てゐる○倒れてゐる○引起さる丶○嘘と白萩○伏猪の床○垣にもたる丶○雨ふらす○露こぼす○うねり○くねる○根ひとつ○襟につめたい○裾にさはる○

（名所）磐余野（大和）○宮城野（陸奥）○

忍ぶ夜嵐かくして居も眠につく島田の亂れ萩　詠み人しらず

露と添寐をひき分られて今朝は萩さへ袖濡す　鶯亭金升

◎蟋蟀。　俗にばつたといふ（仝）

◎絡線虫。　又ギスともいふ（仝）

（虫の條を見あはして作るべし）

◎廿日亥中の月。（三秋を兼る）

（初紅葉）

たつた山木々の梢のはつ紅葉今朝の時雨にまつろおぼゆる　宗良親王

（花の弟）

もゝ草の花の弟となりぬれば八重〳〵にのみ見ゆるしら菊　調照

（二十日の亥の刻に出るゆゑなり）

◎籏芒。（すの部芒の條にあり）

◎初紅葉。（もの部紅葉の條にあり）（八月）

◎放し鳥。　放生會○（八月十五日）

八幡の祭○見込だ男山○功德になる○生るをはあつ○飛せる○つもる放し鳥○飛び立つかもひ○逢ふてはあす○かくれて放す○情をうける○晴れて飛ぶ○廓を出る○籠をはあるゝ○羽根やすめ○慈悲ぢや情ぢや後生ぢや程に今宵斗りは放鳥　詠人不知

そふて二人がけふ神詣うらみ忘れてはなし鳥　濱町邊人

昔うらんだ罪ほろぼしと今日は祭にはなす鳥　櫨の屋笆人

◎花の弟。（きの部菊の條にあり）

◎肌寒。（朝寒。夜寒の條など見るべし）

にの部

◎庭の立琴。（たの部七夕の條にあり）

◎庭たゝき。（鶺鴒。ありせの部見るべし）

ほの部

◎星合。星の契○―祭○―の手向○（七夕の部に併せ出）

◎盆市。（くの部草市の條にあり）

（庭の立琴）
七夕のあふ夜の庭
におく琴のあたり
にひくはさゝがに
の糸　寂蓮

◎鬼灯。がゞち○

鬼灯吹く○吹き鳴す○口のうち○膳にのせる○いつか色づく○虫がつく○膝に置く○口歯にかゝる○人の口にかゝる○白歯見せる○鬼灯ふいた昔○鬼灯賣り○丹波鬼灯○海――○長刀――○茶碗に浮す○枕もとゐ忘れる○はき出す○噛み切る○舌で押す○舌をつかム○歯で抑す○口元愛らし○口紅がつく○人の前歯○こゝろを奥歯○ぢきに怒つてゐる鬼灯に開出かねてる腹の種　仝

聲をたてるは鬼灯ばかり言度おもひは口のうち　仝

◎穂芒。花―○尾花○（すべて芒の條に出す）

への部

◎布瓜。（三秋を兼る）

軒の布瓜○背戸の――○垣の――○からみ附く○しぼり取るゝ○糸瓜と鉢合せ○――に覗かる○――にびつくり○思ひよらぬ處から下る○長くなる○いつしか伸る○糸瓜の水○――の皮○水になる親切○手づるが欲しい○棚を這ふ○這ひあがる○門へからむ○義理も糸瓜も○

忍ぶ夜おぼした垣根の糸瓜添て化粧の水に取　仝

との部

○燈籠。　高燈籠○折掛――○花――○切籠――○影――○舞――○舟――○揚――○牡丹――○（七月）

もゆる○消る○浮名が高燈籠○釣れてゐる○彼世此世○あとが淋しい○消れゞ心のやみと成る○風が來て消す○雨が來て邪魔する○ぼんやりして居る○しよんぼりとした灯影○ぬしの手細工○はたから切り籠○影畫がおかし○畫がうつくし○格子につるす○連子につるす○芳原の燈籠○茶屋の――○市の――○亡き人おもふ○來ぬ君おもふ○

燈籠に夫婦の畫も羨まし影を見せない人故に　賓廼山人

立ち話しをば脱める樣ゐ寺の佛養のたか燈籠　播磨蒼山

土產にもらふた此盆燈籠主に似て居影もある　再來居主人

○蜻蛉。　秋津虫○かげらふ○ヤンマ○赤蜻蛉○（仝）

眼を光らせる○來てはとまる○飛び直す○枝かへる○わたしを秋津虫○ぬしのかげらふ○行方もしらぬ○顏さへ赤とんぼ○放してやる

○蜻蛉をつる○蜘の巣にかゝる○棹のさき○肩にとまる○ふいと立つ○

（蜻蛉野）雄略帝吉野の川上小野に狩し玉ひし時此來りて天皇の臂を嚙ふ其時蜻蛉忽ち來りて虻を嚙み去る帝悅び玉ふ夫より此野の名となりぬ

風の加減で一度は飛ぎもとへ又くるアノ蜻蛉　金亭光升

此頃お出も燈心トンボ些もお顏をみづのうへ　仝

◎番椒。　天井守○高麗胡椒○

からい浮世○赤くなる○色で迷はす○青いうちから○虫除け○手づよく辛い○涙が出る○汗が出す○ヒリ〳〵する○舌にしみる○美くしい顏して居る癖に憎い味もつ唐がらし　實山人

見かけばかりにッィ惚込で辛眼を見る番椒　花坊

（ちゝろ虫）ちゝろ虫夜ふく風や恋からんふくればいとゞ弱る聲かな

ちの部

◎ちゝろ虫。（きりゝすの異名きの部）

◎千代見艸。（菊の異名きの部にあり）

◎契艸。

ぬの部

◎白膠木紅葉。（もの部紅葉の條にあり）

をの部

◎踊。懸踊○念佛―○題目―○燈籠―○伊勢―○木曾―○小町―○七夕―○盆踊○

さす手○ひく手○丸くなる○手が揃ふ○調子につれる○調子づく○浮れ出る○忍んで出る○音頭取る○月にして戻る○闇をたよりに出る○姿を替へる○踊の一群○―の崩れ○輪になつて踊る○團扇太鼓○日傘をさす○心にかけ踊○思ひを――○袖を引る丶○月を見て歸る○知た人に見られる○人の中へ隱れる○袖うつしの文○浮名の種をまく○

いつか輪を拔思た人に指手ひく手の盆をどり　釜廼松風

廓の俄も見飽てぬしと山家ずまゐの盆をどり　目高家錦魚

◎麻柯の箸。（たの部魂祭の條にあり）

（女郎花）

古今　名にめでゝをれるばかりぞ女郎花われ落ちにきと人とはるな　僧正遍昭

仝　女郎花うしと見つゝそ行過る男山よしたてりと思へば

◎送り火。（仝）

◎女郎花。　茶花○をはとちの花○（七月）

風にあぴく○はろりと散る○黄にある○盛り久しい○粟の色○黄金の色○すねる○人に折らるゝ○落る馬○嵯峨野に咲く○垣に咲く○籬に咲く○露にしめる○淋しい色○氣ゝゆるせぬ○かよわい姿○しよんぼり思ふ○美しい形○色のいろ〳〵○

風にさはらず任せた身でも實が來て折女郎花　花の家龍升（古人）

仇に吹よるいたづら風に浮と靡ぬをみなへし　鶯亭金升

顔ゝ白くも色には染る實に聞えぬをとこへし

白く見えても色ある中の心ゆるせぬ男郎花　函館寒可樓

◎荻。―の風○―の聲○（仝）

聲たてる○風に鳴る○狹騷ぐ○—の上風○—をわける○川邊の狹○磯邊の—○すれ合ふ○伏しかさなる○まばらになる○吹るゝ○

懸といふ風我身をせめていつそ心がみだれ狹　詠み人しらず

人が來よと聲をバたてゝ門で知せてくれの狹　赤坂梅のや

◎翁草。（菊の異名きの部にあり）

翁草といふ艸別にありて七月の題なり又松をも翁艸といふ

◎鬼芒。（すの部芒の條にあり）

◎鬼の—こ艸。（紫苑の事なりくの部にあり）

◎弟艸。

◎少女艸。

◎落鮎。　澁鮎○下簗○（八月）

瘦た姿○やつるゝ姿○身を落す○下り坂にある○語るにおちる○心淋しい○流れわたり○育つ○かはる姿○子持ゐなる○

あきと言れて身は瘦るほど苦勞に力も落た鮎　鈍々舍太湖

◎落し水。

氣をおとす○ちからをおとす○秋にあふ○落てあがるゝ○せかるゝ身○あがれの身○

汚れた苦界の泥足あらひ樂に寢て聞く落し水　煉瓦街東州

わの部

◎渡り鳥。色鳥○（八月）

賑ふわたる○歸るあしたに○むれて來る○いろ〳〵の鳥○わたる雁○わたる羽音○空一ぱいに○見上げる空に○秋の空とも向ふぢや知ずはる〳〵通ふて渡る鳥　鷺亭金升

かの部

◎梶の葉。（たの部七夕の條を見るべし）

◎鳥鵲の橋。（仝）

◎懸踊。（をの部踊の條にあり）

◎かげらふ。（との部蜻蛉の條にあり）

◎桂男。（つの部月の條見るべし）

◎螳螂。　とうらう○いぼしり○（七月）

鎌をかける○はたから切る○向ふ見ず○ちきに腹だつ○斧もつ○飛でゆく○飛びつく○氣がはやい○氣がつよい○

（螳螂が斧）及ばぬ譬に螳螂の斧と以て隆車に向ふ如しといふ

のぞく積で近よる垣根帽や手を振いぼむしり　實山人

◎案々子。　彈○鳥却○僧都○添水○　山人

笠着てくらす○人をおどす○恥を案山子○案山子に見られる○——に聞く○——が怖い○——にされる○——あなる○何を的にする○あて無しに覗ふ○月に向く○いつか疲る○すてられる○人を釣る○逃てゆく鳥○しよんぼり立つ○ひとり行む○見廻す○遠く

（案山子）
山田もる僧都の身こうかなしけれ秋果ぬればとふ人もなし　支　雲

でわからぬ○人かあらぬか○闇におぞろく○やぶれ笠○徳利の顔○使を案山子に○機嫌を鳥おどし○山田の案山子○背戸の——○蛾の——○堤の——○雨夜の——○月夜の——○

氣にして待夜は鳴子の音に出見りや案山子の影法師　山閑亭

なりや形に氣を採ぬいて主の機嫌を鳥おどし　柳葉亭主人

待夜の門田に憎氣な案山子主の來方へ弓を引　實山人

◎かせぎ。（鹿の異名あり。しの部にあり）

◎苅萱。（八月）

風の音信まつ苅萱のおもひ穂に出る夕まぐれ　詠み人しらず

◎雁。白雁○鴻○鴉○海雁○たのむの雁○代かへる雁○二季鳥○（仝）

（苅萱）嵐吹く岡邊ゝ茂るかるかやの上葉の露はまづみたれけり　衣笠内大臣

（雁）夫木　霧はるゝ高月山の月影につらもみたれて雁は來にけり

はつ雁やまたあとからもゝ　千代

◎雁の文○雁の陣○雁金。（仝）

（雁金は雁ケ鳴と言を誤りしと云々）

わたる雁○くる——○雨の——○風の——○月の——○浮名がたつ——○うれしくきく——○あいてくる——○おろす——○雲間の——○小田の——○海の——○山の——○峠越す——○厂の玉章○——のたより○——の文字○——に紙む○——の聲○——のしらせ○——の妻○——の影○後れてわたる○つゝいてわたる○うれしくわたる○パッとたつ○別れたむかし○はれて渡る○こゝろも空○への字あり○棹にある○通りぬける○素通りする○聞くも淋しい○しよんぼり聞く○更てまつ身○待ち草臥し身○待ちわびる○明ぬうち歸す○添ひ寐を起す○おもはぬ寐覺め○天窓の上○夢路の上○今宵わたる○おもへば早い○來ると聞く○來たと聞てうれし○秋風身にしむ○

（伏を知る）義家武衡を征し金澤城を攻る時厂列を亂して飛行するを見て兵法に野に伏勢ある時は飛雁列を亂すといへるは是なりとて圍みしが果して伏あり遂に擊て之を敗ると是ぞ大江匡房が傳ふるところ有るに依てなり

闇にまぎれて忍んだ事もあいて人目に掛る雁　台山人

花を涙でわかれた雁も今宵首尾してつきの窓　住吉亭

いやなお客の乙鳥がかへりや好た男の雁が來　木一庵醉痴

蘇武のむかしを此旅枕たより聞せよ雁のこゑ　松羅園合中

渡る雁さへくるとのくの字嬉水戸さへ明て待　雪亭銀升

◎河鹿。（鹿に似る聲ありとて河鹿といふ）（仝）

籠の河鹿○岸の——○いゝ聲○聲惚る○玉川○しづむ苦界○

夜毎心もはそ谷川にひとりきゝ人もあく河鹿　紀州本宮美川

（かたみ艸）めがれせずいつもみまくのかたみ艸なれしも秋と思ふ名殘に

（柿紅葉）秋くれば山の木の葉のいかならん圖生の柿ももみぢしにけり　爲家

しぶかろかしられど柿の初ちぎり　千代

◎かたみ艸。（菊の異名。きの部にあり）

◎柿紅葉。（もの部紅葉の條にあり）

◎柿。　烘柿○酬——○白——○胡廬——○樹練——○木淡——○似——○伽羅——○圓坐——○筆——○田舍——○君遷——○樽——○樽——○（三秋を兼る）

柿の初ちぎり○あまく見られる○盗まれる○たゝき落す○梯子をかける○しぶい顔○顔に似合ぬ○腹の中がしれぬ○種がおほい○樽柿に碎ふ○——の看○柿の皮○——の甘干し○

（お神酒德利）柿の種を割ば德利の形出る是を——————といふ子供等の戯れなり

柿をむいても種をば割て對だと悦ぶ神酒德利　鶯亭金升

よの部

◎よはひ艸。（きの部菊の條を見る可し）

◎夜寒。（朝寒の條に併せて出す）

たの部

◎織女祭。牽星○犬飼星○庭の立琴○星合○—の契○—祭○—の手向○ともし妻○梶の葉○天の川○秋去衣○石枕○九枝燈○紅葉の帳○火取香○願ひの糸○衣裝を曝す○芋の葉の露○索餅○鵲の橋○紅

（立琴）七夕のあふ夜の庭よおく孽のあたりにひくはさゝがにの糸　寂蓮

葉の橋○年の渡○二星の屋形○乞巧奠○乞巧針○乞巧瓜○七箇の池○百箇の池○妻迎へ舟○妻こし舟○七種の舟○

秋さり姫○蘆—○さゝがに—○百子—○糸織—○朝顔—○梶の葉—○硯あらふ○机あらふ○

稀な首尾○たつた一度の——○遇に合ふ○歌をさゝげる○思はせぶりな雲○渡りに舟○緑の橋○胸の雲もはるゝ○星の逢ふ夜に呼ぶ○長居の箒星○煩脳の犬飼星○よいをり姫○袖を濡星○足しあい首尾○何時逢ふやら知ぬ○久しぶりで顔見る○七夕を待夜にうらやむ○今宵の星を眞似る○

（書を曝す）郝隆七月七日日に向て仰き臥して曰く我は腹の中の書をさらすト

（積鼻褌）阮咸七月七日長竿をたてゝ積鼻褌とさらして曰く未だ俗を

免るゝ能はず云々

やつと逢夜にする夫逢は義理と苦勞の二つ星　柳や小つる

苦界はなれて田舍で二人牽牛織女と言れたい　廣島鳴穗堂

指を織り姫時節をまてばはれて逢る空もある　秋芳園東籬

苦勞硯をあらふて主と今宵うれしい星まつり　仝

わるい織姫一夜の事も中をへだてた天のがは　伊勢翠升

せめて一夜と迎ひの手紙氣をば紅葉の橋渡し　柳家みつ女

たつた一夜の話でなりと何か手蔓が星まつり　詠み人しらず

梶の葉よりは楓にかいて色よき返事を願ひ度　小蝶樓主人

糸にかけたる願ひの丈は主ともつれの無樣に　臨升

◎七夕踊。小町一〇（をの部踊の條にあり）

◎題目踊。（仝）

◎高燈籠。（との部燈籠の條にあり）

◎靈祭。　靈棚○棚經○麻柯の箸○送り火○迎ひ火○蓮の飯○鼠尾艸○草市○盆市○（七月）

亡き魂がくる○亡き人まつる○棚へあげる○迷つて來る○ぬしを送り火○日を——○迎ひ火つける○門へ出迎ひ○思ひ出す○從くなく送る○影も見えぬ○備へもの○影身に添ふ○かなしき便○お顔が見たい○來たとのしらせ○つゝむ飯○市へ出る○市を戻る○逢ふもたま棚○遠くからくる客○見えぬ客○風があらぬか○消えてわびし○此世と彼世○闇をもどる○あらす輪○線香の煙○

罪ない鼠尾艸踏り蹴たり實に邪見な野邊の馬　詠み人しらず

幾度迎ひ火出しても主は來と斗でかげもおい　（故）初春新昇

かくれて送り火涙でしめしそうと打消話し聲　實山人

◎龍田姫。（三秋を兼るもの）

人にや言ねど色づく木々にあらぬ噂がたつ田姫　糸　のゝや

◎玉兎。（つの部月の條にあり）（仝）

◎立待月。（十七日の月あり）（仝）

我門をさしわづらひてれるをのこさぞ立ち待ちの月も見るらん　衣笠内大臣

◎鷹の羽芒。（すの部芒の條にあり）

◎玉章。　老鴉瓜○（烏瓜を玉章といふは文をむすべるに似たる故ありとぞ）

赤く色づく○取れぬ垣の上○手づるが欲しい○根を掘り葉を鶏瓜○聲からす○湯に持てゆく○糠袋に入れる○烏がねらふ○たゝき落す○蔓にひかるゝ○曳きおとされる○手近いのは青い○實になる○實の入る○

風呂へゆくにも持つ烏瓜もう名は憎ぬ新世帯　芝伊勢源内清

◎種瓢。

軒につらるゝ○口舌の種○うらみの一○仕込だ一○手蔓もとめる○札つける○

ぶら〳〵して居ばかりが能か夫が苦勞のたね瓢　遷　喬亭

（たのむの雁）みよし野のたのむの雁もひたぶるに君がかたにぞよるとなくなる

◎さのむの雁。（田面の雁といふ事あり）

（雁の部を見るべし）

その部

◎添水。（かの部案山子の條に出づ）

（蘇我菊）
かの見ゆる池邊にたてるうが菊のしげみさえだの色のてこらさ
詠人しらず

（妻迎へ舟）
風葉　ひこぼしの妻迎へ舟こぎづらし天の河原にきりし立しは
○
天の川うきたつ波にひこ星の妻迎へ舟今やこぐらん
○
久方の天の川門は明にけり妻迎り舟今やいづらん

つの部

◎蘇我菊。（黄菊をいふとぞ。さの部菊の條を見るべし）

◎机洗ひ○妻迎へ舟○妻こく舟○妻送り舟○（たの部七夕の條にあり）

◎露。（三秋を兼る）

露けき○露の玉○—の音○—の香○—のひかり○かくすと白露○だれも—○袖の—○露にぬれる○—踏わける○—の命○—の身○—の間○—をちから○—にそぼつ○はろりと落る○玉にある○露にそまる○—にしぼる袖○朝の露○眼ふたの—○はかあき契○何を歎るべに○何をたより○露にはづかし○—を我身に○襟におちる○裾ぬらす○傘ぬらす○戸かられちる○軒からおちる○顔へあたる○露程ない○—しらぬ○—おもふ○—のひぬ間○—にぬるゝ間○—袖をぬらせと露さへ降か出て待戸口の梢から　詠み人しらず
契果敢あき野末の露のゆれを我身の置ところ　寳山人
一度ぬれたが苦勞のもとで乾く間も無袖の露　風流軒大鯉

白露や無分別なるおき處　宗因

（月の桂の花紅葉）
古今　久方の月の桂も秋はなほ紅葉すればやてりまさるらん　忠岑

◎月。

桂男○さゝら文男○照月並○新月○弦月○三日月○玉兎○銀兎○玄兎○在明○哉生明○既望○既生魄○いざよひ○哉生魄○暉素○金波○夕月夜○曉月夜○夕月日○朝月日○立待月○居待月○臥待月○くだり月○廿日亥中○更待月○常娥○真如の月○心の—○胸の—○朔日頃の—○寐まちの—○

しまはし○盃の影○月の霜○—の雪○—の桂の花
紅葉○—の桂の子○—の鼠○—の剣○—の都○—
の蟾○—の兎○—の蝕○—讃男○—の出潮○—の
秋○—の宿○—とあるト○—の友○—の舟○—の
鏡○

はるゝ月○くもる月○雲が邪摩する○天へものぼる心地○心もすむ
○思ひもくもらぬ○隈なき心○月に物かもふ○月にはつかし○月に
覗かるゝ○月が媒つ○月が取り持つ○月が邪摩する○月に浮き立つ
○月に見らるゝ○月を友○月をあるト○月をちから○月を汲ひ○い
ゝ月に不足な首尾○月に幸ひあ逢ふ潮○月見がてら○月を後にする
○月に向く○月に寐ぬ○もるゝ月○かくるゝ—○おちる—○さやけ
き—○松に宿借る—○草をこぼるゝ—○雲からのぞく—○水にあく
—○山に入る—○月にてらさるゝ○—に笑はれさうな○—をうらや

（月）
夫木
有明も秋ぞ名殘の大原や月の朧の山の端の空

都にも人やまつらん石山の峯に殘れる秋の夜の月
爲家

む○—も羨みさうな○—を沙に出る○—の雲を幸ひに寐る○—の雲
が退いてはつかし○—のさはり○—夜鳥がなく○—の影ぼうし○朝
の—○くれの—○ゆふべの—○傘めした—○三笠の—○三保の—○
隅田の—○更科の—○田毎の—○望の月○十五夜○

（名所）御影山（攝津）○梓山（近江）○有明山（信濃）○逢坂山（近江）○足柄山（相
摸）○天香久山（大和）○面影山（長門）○朧山（山城）○曾乃原山（信濃）○蛾拾
山（信濃）○千里山○羽束山（攝津）○石山（近江）○伊豆の海○印南の海（播
摩）○高砂の浦（播摩）○玉の浦（紀伊）○三津江の浦（陸奥）○千里の濱（紀伊）
○黒戸の濱（上總）○住吉の濱（攝津）○播摩潟○

（月宮殿）中秋の夜玄宗帝羅公遠と月を弄ぶ公遠杖を空中に擲ければ
化して橋となる其色銀をのべたる如し帝と共に登り大いなる城闕
に至る公遠曰く是月宮なり仙女數百人舞ふ帝何の曲ぞと問ふ仙樂
へて曰く是霓裳羽衣の曲なり

（悟道）如大尼は千代女といふ金澤顕時の女足利貞氏の妻なり貞氏卒して後美濃の松見寺に行て剃髪し大悟の禪尼とある或時水を汲時桶の底抜ければ詠る

千代のうがいたゝく桶の底抜て水たまらねば月も宿らず

（月を取）周生と言者道術あり中秋の夜雲に梯をかけて月を取んと言て數百條の繩を出し之に乗て月を待來りしといふ

（嫦娥月に奔る）后羿の妻西王母の不死の藥を竊みて奔り身を月に託す是を蟾蜍といふと云々

（月に喘ぐ）呉牛い熱を畏る月を見て誤りて日とれもひて喘ぐといふ。

畏るゝに過じを笑ふ譬に用ひたり

（猿猴の月）佛説に五百の猿樹の下ある井の中に月の影見えしを捕んとして枝より手と尾を相接で井に下る忽ち枝折れて共に死したりと言有り愚なる事に譬て猿猴の水の月といふ

主の來ぬ夜は月にも宿を借さぬ操のまつの色　鶯亭金升

逢にや邪摩がる雲間の月も獨寐る夜は閨の友　仝

主の夢でも見やうと思ひ寐れば月夜になく鴉　三日坊

或夜ひそかに人目をつゝみ主を松から忍ぶ月　千葉眞棒散史

痩た此身を只しるものは其夜照した月ばかり　仝

袖のしづくに枕もぬれる月は辛さも知ぬかは　四傳三尾定

啼て思案も月夜のからす主が來けりや夜が明　神戸松藥

迷ふ雲さへさらりと晴て今ゝや眞如の月を看　生我苦坊

だしに遣つた待夜の月も逢がしめ出閨のそと　小倉の色史

惜いわかれの有明近く瓜のあとはどのこる月　利風庵天鄕

四角張たる座敷を外し丸い月見るぬしのそば　迂兒夢史

虫に明を消させて置てそつと入込ひねやの月　預々木喜作

未練有明見おくる空にやつれ姿でのこるつき　春立園松鶴

月のこぼるゝ伏家に住で愚痴を飜さず暮し度　石巻冷呵子
待た甲斐ある今宵の月にぬしの顔見て晴る胸　別子連小丸
世間へ浮名が立待月にしゞし別れて居待ち月　緑や小まつ
はれて話をして星月夜今はへだての雲がある　うれしく亭
月の明りで見るむかひ文ひとつ讀あい主の胸　静岡乙空
はめて寐た月今更憎いからす啼せたての夜更　蝦蟇史
日數つもりて漸く丸くぬしと樂しむ窓のつき　長崎瓢々生
不破の關の戸こつそり越て月もしのんで板庇　臘亭春升
月の前にも顔さへ出せずやせた此身が寫かと　花の家龍升
逢ぬ夜毎の月ともあつてぬしの獨寐のぞき度　鶯亭金升
忍ぶむかしに怨だ月もはれて今では外の邪摩　神戸鶴枕原
苦勞ある身も無身もあべてあどか物憂月の前　柳家蹴鞠

◎蔦。　蔦紅葉○—かづら○(三秋を兼る)

蔦の宿○—の門○からみ付く○まとひつく○垣の蔦○松の—○先から先○いつかはびこる○何處までも伸る○這かゝる○顔に紅葉○からみ合ふ○附てはあれぬ○退ぬこゝろ○引きはあされぬ○邪摩がられても○うるさく纏ふ○

(名所)宇津の山(駿河)○　唐亭夢多

そばに寄れて嬉しさまさりもたれ掛た蔦かつら　眞棒散史
好たお方の手足にまとひ目出度添日を松の蔦

◎白柿。(かの部柿の條見るべし)

◎月見。　名月○今日の月○芋名月○望の月○十五夜○三五の夜○月華○
(前の月の部に併せて出したり)

（寐待月）
秋の夜のひとり寐
待の月影に身を吹
こなす庭の松風
衣笠内大臣

れの部

◎願ひの糸。（たの部七夕の條にあり）

◎寐待月。（二十日の月なりともいひ十九日ともいふ）

なの部

◎梨。有の實○（三秋を兼る）

割て言ひたい○水氣が多い○つめたい心○水にはあす○庖丁でそぐ○疵をつける○丸かぢり○棚の梨○皿の——○籠の——○梨の切口○話が有の實○

皆わたしの身の戸隱しよ愚痴も岩戸に納め梨　詠み人しらす

◎長き夜。　夜長○（八月）

寢覺さびし○逢ふ夜の儲け○待夜の退屈○寐草臥る○夢を見直す○更た鐘きく○月に寐ぬ○夜ふかしの癖○來ぬ人かこつ○油買ひ足す○行燈と睨めくら○酒に明す○醉もさめる○宵の口說○うたゝ寐に風邪ひく○

秋の夜永も首尾して主に逢ば夏より明やすい　伊勢笠亭

ぬしの所爲でも無とは知て居も待夜の此長さ　詠人不知

◎鳴子。　鳴竿○

小田の鳴子○山田の——○風に鳴る○かげで糸ひく○突然喰はす○耳にあたる○おどろかす○妻に鳴子○何と——○まゝに——○おど

しに乗る○外でひかるゝ○(案山子の條見合す可し)
外の女とよせあい様に背中へつけ度ア、鳴子　一笑亭一笑

むの部

◎迎へ火。送り火○(たの部靈祭の條に出す)

◎虫。虫籠○―合せ○―賣り○―撰み○(三秋を兼る)

足音に音を止む虫○忍び啼く雨の―○なきやむ―○啼きつのる―○
口舌も闇の―○苦界の籠の―○かげ、で啼く○うれしく啼く○賣れて
啼く○一人啼く○千話を消るゝ○遠く啼く○耳につく○枕にひびく
○灯へ來る○そっと戸へ忍んで啼く○壁になく○たれを松虫○りん
と一聲○虫の聲々○―の闇○―に消される○―が舌ぅち○野の―○
庭の―○月の―○
宿のさびしさ主松虫の鳴くもてゝろの八重葎　蝸篆・卿舎
秋の夜風の身にしみ〳〵と誰を松虫音をはそく　(古人)
まてと便もあく鈴虫の振すてらるゝは恨しい　函館芝闇
庭にや虫の音外には小砂利鳴と止とが忍邪摩　新橋邊人

◎盂蘭盆會。(靈祭の條見るべし)

◎梅紅葉。(もの部紅葉の條を見るべし)
(梅の木の葉の紅葉せしをいふなり)

のの部

◎殘る蚊○殘る螢○殘る蠅○

（秋の蝶の條に併せて出したり）

◎後の出替。（八月）

◎後の彼岸。（八月）

◎後の藪入。（七月）

（秋のものを道具につかひて新しき作意有可し）

おもひ殘して宿出代りの歸る乙鳥のこゝろ持　横濱　一舟

外へ藪入口うら盆の閻摩に舌をぬかれさう　千住　芳廼家

◎殘る暑。秋暑○

（仝）

怨みの胸にも暑がのこる秋といふ字に誘れて　實　山人

◎野分。（八月）

あびかぬ卿も無い○けんまくが怖しい○急にくる○手強く出る○うらみを夕野分○消てゆく○通りぬける○大げさに來る○後は根のない○砂はこり立つ○水烟たつ○後へ通す○顔向がならぬ○

消えりや心もすむ月明り一時手強くゆふ野分　實廼　山人

◎後の月。（しの部十三夜の條にあり）

くの部

◎鑢蟲。（むの部虫の條にあり）

◎降り月。（十六七夜の既望すぐる月をいふとぞ）

◎栗。毬栗○燒栗○さゝ栗○柴栗○剝栗○打栗○出落栗○三度栗○山栗○搗栗○錐栗○（九月）

栗を剝く○—をゆでる○—を煮る○升ではかる○皮むく○上邊い針もつ○ひろひに出る○一夜におちる○浮氣をやく○笑ふ○笑む○實がいる○とげの有る心○ちく〳〵刺れる○ポンとはねる○殼からはね出す○落ておぞろく○いつか味もつ○一粒もの○生でくふ○澁がとれる○

譯がわかればとげ〳〵言ず斯なりや笑て落る栗　詠み人しらす

一寸笑み栗言葉のうちに針があるとは怖しい　仝

やの部

◎柳ちる。（春夏の柳の部てらし見るべし）

秋にあふて散る○風もたのまぬ○さびしく成る○其まゝの形○葉があい○わびしき身○はか無き身○いつしか散る○待ぬ日にちる○ちるも本意あい○あらはにある○見え透く心○なびく氣もない○引きたゝぬ氣○結ぼる〳〵心○色もさめる○

風にまかせた柳の葉さへ時が來あら散ものを　（古　人）

たのむ風にも吹きはあされて心淋しくちる柳　詠み人しらす

仇に靡いたむかしの春を戀しがらせて柳散る　寶　山　人

◎やんま。（との部蜻蛉の條に出す）

◎山雀。（八月）

藝をする○器用あたち○まめに働く○うるさく囀る○逆しまに飛ぶ○つれ立てゆく○空をはしる○曲をする○藝が上手○見世物○氣儘育ちに飛ぶ山雀の藝もあい事してくるふ　芝紫林仙史

◎敗荷。（八月）

◎破芭蕉。（九月）

池の蓮葉○破てくやしい○盟も破るゝ○根に力がある○露にわかるゝ○泥に呼吸つく○庭の芭蕉○雨に破れる○風にまかす○ひかれぬ芭蕉○のがれぬ——○雨をもらす○きれ〳〵に成る○さびしく成る○哀あ姿に成る○

堪忍袋もやぶれた蓮のいとしい中さく傍の口　詠み人しらず

露のちぎりも此頃絶てこゝろ淋しき破れ荷葉　深川邊人

破れかぶれに成迄引ぬ言勝つむりのこの芭蕉　詠み人しらず

まの部

（麻苧穂の芒）
花ぜますほの糸をくりかけて絶ずも人をおもほゆるかな　俊頼

◎松虫。（むの部虫の條にあり）

◎十寸穂の芒。（穂の長さ一尺の芒をいふ）

◎眞蘇宇の芒。（色赤き芒あり眞蘇枋といふ意）

◎麻苧穂の芒。（眞麻の心あり）
（共にすの部すゝきの條）

◎待宵。（八月十四日の月をいふ）

◎松茸。　茸狩○（八月）

◎舞茸。　わらひ茸○天狗茸○（仝）

うつと顔出す○見つけてうれし○初もの○ひらく傘○土を出る○ね

れて出る○ぬれて廣がる○ふみ付らるゝ○うかとは踏ぬ○足もとへ出る○人に取るゝ○道しるべ頼む○香がたかい○パッと匂ふ○逆上るほど○わすれられない味○ぬしを松○色かへぬ木○松葉をわけて○深入りする○だしに遣ふ○生きのびる○いやな形○ころげて立つ○土のまゝ○朽木のそば○くされる○そだち過る○迷ふ山路○眼らつりがする○氣のつかぬところ○堀りあてる○探りあてる○人に取れて逆上る香狭いをんなのきの子狩り　寶山人

出られる時節を松茸さへも人の眼に附時が有　小川知升

おもはずうかゝ深入したも迷ふたがひの背山　鶯亭金升

◎豆名月。（十五夜の月を芋名月といふに對して十三夜の月を豆名月といふ）

◎鞠花。（菊の異名なり。きの部菊の條にあり）

ふの部

◎古枝艸。（萩の異名なり。はの部）

◎藤袴。　あらゝぎ○（七月）

折目高にさく○廂にさげる○ひけも異聞○すきも――○間も――の○さびしい色○淋しゝ匂ふ○袖に移り香○ちる匂ひ○白く見えてもアノ藤袴花も何うやら氣が多い　詠み人しらす

（古枝艸）宮城野や露も色ある古枝艸今年の秋も花はさきけり　西行

（藤袴）古今　何人かさ　ぬぎかけし藤袴くる秋ごとに野邊ゝ匂はす　（筆津虫）

◎筆津虫。（蟋蟀の異名なり。きの部）

ふでつむし秋も今はさ淺茅生にかたおろしなる聲よはるなり

◎臥待月。（十九夜の月なりといふ）

◎更待月。（二十日の月なり）

◎匏。（ゆの部夕顔の條にあり）

◎葡萄。（八月）

鈴生り○棚にあがる○甲州から出る○問屋へおらぶ○一粒撰り○すいの身○ふさの儘○汁をすふ○つるに取りつく○旨くお前に種をば蒔れ今ドや身重になる葡萄　すみよし亭

◎二季鳥。（雁の異名ありかの部にあり）

（二季鳥）
いづかたを古里とてか二季鳥さしに二度行かへるらん　忠岑

この部

◎小町踊。（をの部踊の條にあり）

◎竈馬。　いとゞ○（虫の部てらし見べし）（七月）

壁所におく○椽の下にしのぶ○隠れてすだく○日蔭の住居○啼く音さびしき○壁をもる○忍び音になく○獨りなく○寐られぬ夜○足音に默止る○闇をたより○足がとれる○飛でくる○道ひ出す○嬉しい勝手の竈の下で何を忍んでなくいとゞ　寶廼山人

庭の竈馬が待つ耳ざはり我も心のやみにおく　仝

◎心の月。（清き心をいふあり）

◎氷の輪。（月の事つの部にあり）

◎氷の鏡。

◎胡盧柿。（かの部柿の條にあり）

◎樹練柿。（仝）

◎御所柿。（仝）

◎小望月。（十四日の月をいふ）

◎衣うつ。（きの部砧の條にあり）

◎金草。（菊の異名ありきの部）

（金艸）名にしおふ東の野邊のこがね艸これもみつきの數につまゝし

えの部

◎青芋。（いの部芋の條見るべし）

ての部

◎照月次。（てる月を月次にかけて歌によめり）

◎天狗茸。（毒ある茸あり）

あの部

◎天の川。銀河○銀漢○雲漢○星河○河漢○（七月）

わたり澄す○うれしく渡る○空を流るゝ○仰向いて見る○空がてひしい○波風たゝぬ○底が知ぬ○人しらぬ流れ○星のちぎり○—の首尾○帶のやふ○消てゆく○何處へ流るゝ○何處を源○

あらば翌朝い雨せき下せとめた夜に見天の川　鶯亭金升

（七夕の部見合す可し）

（照月次）水の面にてる月次を數ふれば今宵ぞ秋の最中なりける　源順

◎秋茄子。（夏の茄子の條見るべし）

秋風たゝれて萎れた茄子色のさめたを氣に掛　萬作

◎扇置。（團扇置）（七月）

風のたより○氣を置く○忘れる○秋の扇とすてらるゝ○骨折し甲斐もなく○骨身にしみる○用のあい身○心を置るゝ○すてられて悔しい○放れ〳〵○かまはぬ主○昨日に變る身○

たび〳〵扇も最う季がかはり棄て置とは恨しい　金衣公子

何處へ行にもつれ立ものを秋とは難面置き扇　前橋素面

風のたよりも此頃失せて秋にあふ身のすて扇　虹亭仙升

やぶれかぶれと最なるからは義理も今更捨圃　（古人）

◎牽牛花。（かゝみ卿）○（仝）

朝顔に釣瓶とられてもらひ水　千代

歸す朝顔○止めた——○情も——○思案——○かゝみ卿のうつり氣○俤うつす○止めたい姿○まとひつく○義理にからむ○なさけの蔓○蕾の筆○見るまに開く○見る間にしぼれる○力竹○力を添え竹○寐衣のまゝで眺める○智恵を絞り咲き○お茶臺○咲きわける○待ち合した今朝○あしたを待つ○門をしめ切れる○窓にすがりつく○入谷の朝顔○寐みだれ髪のまゝ見る○楊枝かみ切る○一日〳〵咲く○朝〳〵の移り氣○其日〳〵にかはる心○心は土器鉢○これも緑日○翌日を契る○

夫ぢや情が主や朝顔さ昨日に變つた今日の色　鶯家梅升

宵の口舌も朝顔みれば撚りを戻したわかれ際　詠み人しらず

歸す朝顔わかれのつらさ止る手蔓の無ものか　粹多音〆

◎秋津虫。（蜻蛉の事ありとの部見るべし）

（七月）

◎秋の蝶。

◎秋の螢。　殘る螢　（仝）

◎秋の蠅。　殘る蠅　（仝）

◎秋の蟬。　殘る蟬　（仝）

◎秋の蚊。　殘る蚊　（仝）

はかなき身○姿かはる○むかしを嘲つ○今や消んと○殘る浮名○君を思ふて殘る○獨のこる○後に殘る○聲を枯す○憎まれた昨日○愛された昨日○昨日のゆめ○秋に逢ふ身は○秋にされたで○日蔭の蟬○土遁ふ螢○こがるゝ蝶○やつるゝ蝶○忍ぶ身○花と寐身と今では夢とひとりはかあむ秋の蝶

寶山人

おくにや啼れず秋野の螢露を命とくらす今日　仝

うるさく思た浮名は昨日今日は此身に秋の蠅　仝

聲のありたけ盡た異見それをいまさら秋の蟬　仝

待夜いぢめた報か蚊まで痩たすがたで殘る今　仝

◎朝月夜○朝の月○（朝の月は十七日より二十八日迄なり）

◎曉月夜。

◎有明。（空に有て明るといふ意）

◎秋の雨。

日々にさびしさ心の所爲か秋の雨さへ身に染　坪江つむ

◎秋の風。

あかくと
日はつれなくも
秋の風
はせを

心さびしく吹く○襟を吹く○物思ふ○いつか身にくる秋○主が秋風ふかす○たよりも無い○吹れて通る○寒うある○身にしむ○胸にこたへる○わたしに秋の風○いつしか――――○この身に――――○

忍ぶ夜道に氣をくばれとて後から吹く秋の風　神戸　鷲枕房

桐の一葉のおとづれ絶て主は小窓にあきの風　寶廼山人

互ひの心の底には吹ぬ浮世ばかりのあきの風　仝

つらい秋風身にしむ斗夜毎苦勞をかさね夜具〻〻合史

ふけてぼんやり主待閨ゐいとゞ身に染秋の風　仝

◎秋の空。　秋の天氣○

定めなき心○今朝と今宵○見る間にかはる○あてに成ぬ○夫と極らぬ○ぬるゝ袖○くもる心○晴ては悅ぶ○ぬれてくやし○雲行きが知ぬ○

こはい嵐は見間にのいて暫氣のすむ秋のそら　寶山人

はれた空にも名のつく秋よ君の心ぞ定めなき　仝

◎秋の七艸。（萩○尾花○葛○瞿麥○女郎花○藤袴○牽牛花○をいふ皆夫〳〵の條にて見可し）

（撫子は夏あれど冬までもあるもの故詠み方に依りて秋にも冬にも取あつかふ可し）

◎綾巻。（きの部砧の條にあり）

◎有の實。（梨といふを忌ていふ。あの部梨の條にあり）

◎秋の暮。

人が來ぬ○待ち人遲い○手を膝に置く○何にも飽る○鐘きゝわびる○わたしを秋の暮○隣も遠い○文も來ぬ○雨摸樣○煙管を杖につく

○辻占見る○外をながめる○くれて行く○今日も暮る○立膝におる○酒でまぎらす○手酌でしの〻○つらさの勤め○いやな人は來る○文書きわびる○筆の持草臥○一日寐た○朝のまゝで居る○鳥影も空だのめ○格子に倚る○柱にもたれる○

ひとり苦勞を鳴立澤にすまぬこゝろの秋の暮　山谷柳翠軒

はれぬ心に霧立のぼる露かあみだか秋のくれ　上毛月州

降と祈らぬ雨音信れて人い出て來ぬ秋のゆふ　寶山人

浦の苫家の畑ぢやあいが莫もさびしい秋の暮　麹町糸のや

◎秋しくの花。（菊の異名といふ）

◎朝寒○夜寒○

朝寒の閨○何處とあく○夫とあく○そこら掃く○起きるもつらい○灰ふるふ○庭の箒目○とめた朝寒○かへす——○待つ身にこたへる

○ひとり夜寒○夜寒の床○つらい夜寒の○——とかこつ○肌にしみる風○身に入る鐘○心淋しい○寐でのむ酒○枕さびしい○泊た夜寒○——をかくす○——を忘れる○——も知ぬ○——かこつけ○

とめずに歸てやる朝寒の閨も身にしむ嫉み樣　甲斐勝沼考亭

實で止るに此朝寒に歸るはつめたいぬしの胸　柳家乙鳥

さの部

◎さゞれ萩。（葉の細おるをいふ）

◎さゝらえ男。（佐々良衣男）

萬葉　山のはのさゝらえ男天の原さわたる光みらくしよしも

◎盃の影○盃の光○（月の事つの部にあり）

◎澁鮎。（をの部落鮎の條にあり）

◎栃栗。（くの部栗の條にあり）

きの部

◎桔梗。（七月）

（桔梗）古今物名　秋近う野はなりにけり白露のおける艸葉も色かはり行く　友則

露にぬるゝ○むらさき色○さかり久しい○かはる色○ゝあれぬ桔梗○かはらぬ——○わからぬ——○色は變れど變らぬ桔梗花のいのちの末ながく　實廼山人

◎蟋蟀。　筆つ虫○ちゝろ虫○すげの庭鳥○（仝）

衣かたしく○舌うち○籠に啼く○棲の戸○艸の上○こゝろ細い○こゝろ淋しい○忍びてすだく○ひとり鳴く○髭ふる○抜け毛かこつ○病の床○枕に倚る○滯團がうすい○鏡見て嘆く○戀しい寢覺○風の音きく○去れし身○せかれし身○獨りくらす○さびしき月日○手をきり〳〵す○身を——○えにしを——○すがれ音○更わたる○鏡に眉をば寫た小窓すれとないてるきり〳〵す　仝

捨られし身を愚痴夕暮に貰おきする　詠亭壽升

やせておいてる苦勞も知す鼬の道をゞ蟋蟀　石岡日進堂

◎霧。

朝霧○夕——○——の笆○——の海○——の香○——雨○——立人○胸の——○

（霧立人ゝ隔てたる人をいふ）

とれやらぬ胸の霧○たち隱す——○隔つる——○雨の降やうあ——○きぬ

くの霧○別れ路の―○中も深―○怨みもはるゝ―○お顔が見えぬ
○姿が知ぬ○行方がわからぬ○影をかくした様な○浮名が立つやう
な○霧除けの梅干○霧にしめる袖○それと見わかぬ○立かくす○押
かくす○　詠み人しらず

歸す朝は見かくる影を霧もさつして押かくす

せかれて苦勞を汐路の標木先の樣子が知ぬ霧　仝

◎錦馬。（鹿の異名あり）

◎砧。四手打○綾卷○衣打○しころ打○（八月）

小夜碪○遠―○風の―○雨夜の―○月に―の○音する―○ぬしが―
○時刻が―○こゝろが合―○はづむ―○調子づく○うち明して言ふ
○足音かと思ふ○耳につく○遠くなり近くなる○更て聞やむ○音信
も無い○音沙汰もあい○うつゝに聞く○玉川○寐覺のつらさ○
風がもてくるアノ遠砧逢夜動氣の拍子取る　鶯亭金升

足の音かと出て見りや砧門に待夜の拍子ぬけ　仝

待に來ぬ夜は夫さへくやし誰を合手かアノ砧　仝

◎木の子取。（まの部松茸の條に出す）

◎啄木鳥。てらつゝき○（八月）

はぢくる○堀て聞く○樹のうろ○朽た木○口がにくい○かはらぬ啄
木鳥○今宵―――○いつ―――○主が―――○待ば―――○
何處から何處迄穴をば探し浮た啄木鳥止ぬ主　詠み人しらず

◎菊。かはらよもぎ○百夜艸○星見艸○金草○かたみ草
○千代見草○齡草○山路草○少女草○弟艸○草の
主○殘草○弟花○花の弟○百菊○猩々菊○醉楊菊
○大白○大盤若○翁草○隱君子○女花○鞠花○秋
（草の主）かばかりの句はあらじ菊の花うべこそ草のあるじなりけり　国房

（菊の淵）

古今　わが宿の菊の白露けふ毎に幾世つもりて淵なさるらん

（白菊）

今秋見ればさながら雪をいたゞいて翁さびたり白菊の花　基俊

（酒をおくる）

古今　花見つゝ人まつ時は白妙の袖かさのみぞあやまたれける

の花○秋しくの花○契草○蘇我菊○承和の色○殘菊○野菊○淵○金目貫○秋牡丹○

誰白菊○わけも――○咥と――○人のこゝろも――○まけぬ黄菊○はなれぬ――○ぬしが――○狂ひ咲き○うつろはぬ色○露に染る○大輪○小輪○作つた枝○罪と作り菊○衣紋を――○盛り砂○花壇○雨障子○狂ふ蝶○鉢植え○緑日○染井の菊○團子坂の――○

（酒をおくる）陶淵明菊を愛し酒を飲て樂みけり九月九日酒なくして菊のもとに立けるが白き衣着たる人酒を贈り來るを見る至れい王弘あり云云或は又王弘が使ともいふ

わたしの實意も主や白菊の今が浮氣の眞盛り　紅亭花笑

君に露程實意が有ば萬ざら邪見にやせぬ黄菊　可愛可樓

見はつけたり首尾する今日は菊の花より團子坂　白山邊人

野暮お作りも見せ度人をたのひ心のきく細工　乙女庵

やせた小菊のかよわな身でも主を苦界の力竹　詠み人しらす

ゆの部

◎夕顔の實。ふくべ○ひさご○（ひの部瓢の條見合すべし）（七月）

軒のひさご○畑の――○大きお腹○胸にしめくゝり○青い身○口をふさぐ○情のつる○手づる○のびる○はびこる○だん〳〵育つ○待かねた○育て甲斐○望まるゝ○主ある體○花のうちから約束○言ひなづけ○まゝにあり瓢○氣に――○何う――○口をふくべ○來る――○瓢の色○――の蔓○――の種○――がおゞろかす○入谷の瓢○（瓢簞とは別種あり然ど併せてしるす）

いつも逢度うそ夕貌の實よある話はあいお前　詠人不知

青いうちから心をかけて夫と見込だ生ひさご　寶山人

めの部

◎名月。（つの部月見の條にあり）

◎眼白鳥。（八月）

ひたる眼白鳥○籠の――――○押しッくら○押しつ押れつ○中から拔る○拔て出る○押しつける○仲間を拔る○外の眼白○はたの――――○義理と義理とで押附られて辛い目白に合られ　仝

みの部

◎三日月。（三秋を兼る）

そつと三日月○ちらと――――○お顔――――○細めになる○三日月の眉○――――の櫛○――――の姿○――――形の爪あと○連子で三日月拜むにつけて早く取たい此眉毛　詠人不知

◎簑虫。　鬼の子○（仝）

浮世をのぞく○籠り居○深くかくれて○外は見ぬ○首と出す○つらいみの虫○そつと――――○ちゝよと啼く○ひとり啼く○すだく○忍びて啼く○ちりに隱るゝ○親に似ぬ○あゝれな身○わびしき住居○世間しら寸の此簑虫も思ひありやこそ忍び啼　寶山人

忍びしにおく簑虫のわれからこゝろの闇住居　寶山人

◎三度栗。（くの部栗の條にあり）

◎密柑。

紀の國育ち○紀文の富○わるい筋○かぶる皮○ひき裂れる○田町の問屋○多い種○種あしに成る○密柑の肴○輪ぎりにする○むく皮○剝ぐ皮○すいの身○匂ふ○香に橘○浮名が―○氣が―○青いうちから○鉢植ゑの密柑○籠の――○箱の――○密柑箱○あたり――○（お盃）密柑の皮を丸く切て盃とおす。子供の遊びあり

（お獅子）密柑の房を切て指に引掛獅子を舞すといふ。右に同ト

苦勞の筋さへ斯取除けてうまく添るゝ此密柑　詠人しらず

おもふ一房引わけられて憂目密柑のすゐの果　仝

◎鼠尾艸。水掛艸といふ（たの部魂祭の條に出す）

しの部

◎鹿鳴艸。（萩の事。はの部にあり）

◎篠芒（すの部芒の條にあり）

◎しまほし。（月の異名なり）

◎鹿。紅葉鳥○さをしか○夢野の―○肩拔―○鹿笛○―垣○―狩○（三秋を兼る）

妻戀ふ鹿○妻まつ―○峯の―○谷の―○尾上の―○鹿の音○―の妹○―聞く○―の炎○身にうまさるゝ○おもひ棧○藤橋○咀ひたひ○春日の鹿○月に鳴く○紅葉に鳴く○問ふ聲○鹿の○氣が鳴く鹿の○

（鹿鳴艸）都にも咲にほへども鹿のなく名におふ艸は秋の山里（しまほし）

さよふくるみどりの空に風ふけばいとゝさえまさるしまほしの星の影（鹿）

古今　秋萩の花ざかりにけり高砂の尾上の鹿は今やなくらん

てひしき妹○思ひわふ○妻よびかわす○かへろと鳴く○心を傷る○古郷おもふ○旅の心地○わかれが牡鹿○わたしゝ牝鹿○笛に欺さるゝ○一に寄る○ねらはるゝ○夫にわかるゝ○中を隔つ○穴にはまる○垣にこゝろ置く○心に垣むすぶ○遠く通ふ○近く馴る○角を出す○またらお毛○一對そろふ○鹿毛の筆○一の巻筆○矢にかゝる○玉にあたる○鹿の吸物○一の皮○

(狩をとゞむ)和泉式部の夫保昌狩せんとする日の前の夜鹿の聲聞へければ式部心憂くおもひて

ことわりやいかでか鹿の鳴ざらん今宵ばかりの命と思へば

ト詠しに保昌感ずて翌日の狩をとゞめしといふ

(夢野の鹿)黒主といふ人つげ野と言所に泊りしが傍の藪に鹿二頭在りて男鹿いふ我昨夜背中に霜置きし夢を見たりト女鹿聞てよくよく慎み玉へ狩おそゐありて背に鹽ふらるゝ兆おらんも知可らずと言

(夢野の鹿)
已が身に霜おく夢や見えつらん心いろけに鹿ぞなくなる
紫性法師

ふ。やがて狩する人此鹿を射て皮を剝ぎ鹽うちあぶりしたるを見しといふ此心にて夢野といひ又霜おく夢といふ

(名所)奈良山(大和)○妻戀山(丹波)○高砂山(播磨)○鹿島山(常陸)○木曾山

逢ふて話の間も啼く鹿のかへろ〳〵とぢらす主　寶山人

秋に逢ても深山の鹿も心さみしく鳴きあかす　瓢々生

戀のやみ路ゐてらさぬ月にないて妻乞峯の鹿　寶廼山人

◎鵲。鳴突網○一の羽搔○一の看經○(仝)

澤の鳴○野の鳴○鳴立つ澤○うるさい羽虫○籠のうき目○網にかゝる○燒れる○ないて淋しい○飛たつ斗り○百羽搔き○ゝとして居る○しよんぼりと居る○あはれな景色○わびしい姿○待夜に聞○出て見る○

戀ゆゑしよんぼり外目も耻ず獨思案に暮の鳴　仝

(鳴の羽搔)
古今
曉の鳴の羽がきも羽がき君がこゝぬ夜は我ぞ敷かく

ぬしのあとから彼鳴迄も淋しがらせて立て行　仝

◎四手打。　○しころ打○（きの部礎の條にあり）

◎紫苑。　鬼の醜女艸○（八月）

長くある○垣の上からのぞく○紫苑と丈くらべ○影が長い○いつしが伸る○雨にのびる○よい紫苑○はおしを――○鬼と言れて○花の數○

（忘れぬ艸）晋親を失ひし兄弟あり兄は公に使へて暇なければ思ひける樣いかで嘆きを忘れんにはと墓に忘れ艸（萱艸）を植たり弟はいたく恨みて紫苑は忘れぬ艸なりとて植たり。兄は其家を思ふ餘りに忘れ艸を植て公に忠をつくし弟は忘れぬ艸と植て孝行怠ず共に德を得たりとかや

露にうらみを夕邊の紫苑ひとり垣根に立盡す　仝

紫苑は首尾をば忘ぬ艸か垣の外面に主の眞似　仝

◎新酒。　今年酒○新走り○中汲○醡醾醁○袋洗○色に出る○さめる醉○つく舟○港入り○ひらく樽○呑み口○呑み心○香にたつ○にほふ○

浮氣新酒とさいたるあとは直に袋のあらひ立　仝　千葉喬亭蘿升

つくす實意も地造あがら主へみつぎの今年酒　吟花情史

のみ込樣でもさめるが常よ主は新酒の水臭い

◎十三夜。　後の月○二夜の月○豆名月○栗名月○

（月の部をてらし見て后の月の作意有たし）

過し月見がはなしの初め豆も實の入る后の月　青森一松

◎女花。（菊の異名なり）

◎承和の色。（全）

◎白菊。（共に菊の條にあり）

◎椎の實。　椎柴○椎の葉○

一圖におちる○實が入る○虫ばみ○虫喰ひ○雨の樣○笠へ落る○襟へ落る○戸へあたる○椎の蔭○——が下○——の葉につゆ○——の實の俵○——ひろひ○——を見つける○袂から出す○袋入り○嚙みくだく○割る○はぢける○石を打つ○礫うつ○棹でたゝく○屆かぬところ○高い枝○鳥が見つける○　詠人しらす

嬉しい雨かと枕をはなれ見れば力も落た椎

◎新蕎麥。今年蕎麥○（刈は冬あり）

◎新米。　今年米○併せて左にしるす

のびる○のびぬうち○太打ち○細うち○茶蕎麥○更科の——○いゝ粉○新米相場○あたらしき米○味がある○色白○一粒もの○いゝ出來○これ迄の苦○樂しむ今年○うれしい——○迎へた——○

苦勞信濃の新蕎麥より也私やお前のそばが宜　（古　人）

したぢは好あり苦を新蕎麥の細く長と契中　王子鯉風

今年の米とは名も新しく持た世帶の焚き初め　寶　山　人

ひの部

◎一葉。桐一葉　（一葉ハ桐を也柳を也いふとぞ）

秋が來てちる○秋に逢てちる○ふいと散る○はつと散る○いつしか散る○にくい一葉○こひしい——○おもふ——○來ぬ——○

秋をしらせる一葉と思や寄まつ身の氣に掛る　初音粹史

いつか浮名をちらして置て憎い一葉の切支度　柳家くめ

來ぬは秋かと苦にする窓へ今朝は一葉が音信　寶山人

◎蜩。（夏の蟬の條あゞ見合すべし）

黄昏ちかい○今日も日ぐらし○其日ぐらし○ないて暮ゆく○山の向ふはくれる○くれた里○くれぬ里○鳴きつゞける○通り雨○晴てくる〳〵○しづむ日○おちる日○沒り日○斜陽○尾上○峯○麓○晡○暮をまつ身にやアノ蜩も沒日早めるやうに聞　仝

はれて嬉しうなく蜩の今ぢや苦勞も通りあめ　仝

◎瓢蕈。百生○千生○青瓢蕈○（三秋を兼る）

（ゆの部夕顔の實の條見合すべし）

蔓一筋○しめくゝり○青いうちから○からむ絲○腹に實の無○

何に見とれてアノ瓢簞は垣根傳ひに忍ぶやら　岩代二本坊

もの部

◎もゝかゞり。（いの部稻妻の條にあり）

◎紅葉鳥。（鹿の異名。しの部にあり）

◎藻に住む虫音になく。

我からあく○しのび音になく○ぬれてなく○あがれの身○

ふかく隱れて藻に住虫の何を苦勞か忍びあき　仝

浮つ沈みつ藻にすむ虫の戀にわれから泣明す　鶯亭金升

（紅葉鳥）

しぐれ降る立田の山の紅葉鳥もみちの衣きてやなくらん

（藻に住虫）

古今　蜑のかる藻にすむ虫のわれからとなこそなかめ世をばうらみじ　直子

◎百夜艸。（菊の異名あり）

◎紅葉。　楓○紅葉の舟○―狩○――衣○――鮒○

櫨紅葉○柞の――○白膠木――○鳶――○檀――○柏――○楢――

○柿――○梅――○櫻――○色見せる○色うつろふ○氣で氣を紅葉

○濡れて色をます○思ひ染る○色に出る○顔にさす日○茜さす○情

がうす紅葉○うらみを夕紅葉○簪にする○盃にちる○錦着かざる○

錦織る○はつ時雨にさそはれる○色に立田の紅葉○つらい箕尾の―

―○昨日の青葉○青いうちから待た色○晴て色を増す○赤いこゝし。

○つきまとふて色づく（鳶紅葉）○滝の川の紅葉○照かへす○うつろふ

心○いつしか染る○仰うつす○

（名所）三室山（大和）○船木山（美濃）○上方山（對島）○小倉山（山城）○半山（近江）○高尾○滝の川（東京）○妙義山（上野）○白井峠（仝）○

（紅葉）

夫木　たかしきや上方山の紅葉を吹なちらしう沖津沙風

紅葉する高機山を秋ゆけば下てるはかり錦織りしく　顕仲

（紅葉を焚）高倉帝御幼稚にて在す折御秘藏の楓ありしが心無き仕丁枝を剪り薪として酒を暖め居たるを守役藤原信成見て驚き具に狀を奏して罪を乞ふ帝從容として曰く唐詩に林間酒を暖めて紅葉を燒くとあり仕丁も此風流を知たるやと復問ひ給ざりし

（古人）

秋が來たかと紅葉に問ば鹿と返事もあり兼る　春曉舍靜夢

ならぶ楓にてらされあがら顔を赤めた谷の水　光姿歌史

霜におもひを搔口説かれて赤く成たる鳶紅葉　寶山人

上邊ばかりの錦いやよあぢゝ怨みを夕紅葉

せの部

◎鶺鴒。　稲負鳥○庭たゝき○（八月）

懇教へし鳥○懇の師匠○せきに鶺鴒○尻をもぢ〳〵○尾でたゝく○

ぬけて行く○尻をふる○見てはづかし○來てうれし○
戀を敎へしアノ鶺鴒が何故か獨りで何時くる　詠み人しらす
來たとしらせに氣も鶺鴒の浮て尻さへ落附ぬ　寶廼山人

すの部

◎西瓜。（七月）

わつて言たい○赤いこゝろ○多い種○水くさい○水氣たつぷり○たゝいて御覽○井戸へ冷す○切る○たち割る○たち賣り○赤い紙○重い○持あつかふ○厚皮○砂村○畑の西瓜○籠の——○皿の——○西瓜

嘘か本場か問屋の西瓜上邊ぢや分らぬ主の腹　仝

◎すゞの庭鳥。（きりぐゝすの異名あり。きの部にあり）

◎芒。

綏芒○篠芒（穂に出ぬ芒あり）○鷹の羽——○糸——○旗——○十寸穂の——○麻苧穂の——○眞蘇苧の——○穂——○花——○鬼——○尾花○（三秋を兼る）

招く○首ふる○風になびく○伏しかさある○踏み越える○野の果○野の住居○芒がのぞく○月が漏る○穂に出る思ひ○穂ゐ出るうらみ○うぢく心○緑の糸芒○手を切る○さいれば切れる○根のしまり○一まとめ○野あるき○月見もぢり○獨旅○足音をきく○芒生ふ伏家○武藏野○穂屋の芒○ちる尾花○ちる芒○綿のやふ○毛のやふ○

（あゝめ〳〵）業平朝臣東下りの折陸奥やすしまと言所に宿りし夜野中にて「秋風の吹につけてもあゝめ〳〵」トいふ歌の上の句を詠する聲あり其處へ行て見ば髑髏の眼より芒一もと出て居たり怪しく思

て厥邊の人に問ば小野小町此國に下りて此所にて終れり其頭こそ小町なりといふ業平あはれに思て下の句を付たり其句「小野とは言ト芒生けり」其野を玉造小野といふとぞ

穂屋の芒と身は刈られて主を招かう手も出ぬ　詠み人しらず

吉田通れば二階はおろか招く芒が野にもある　梅亭金鵝

よると障ると手を切れ抔と邪見な鴉母の鬼芒　鶯亭金升

とけぬ思ひが伏し重なつて風の芒のもつれ髪　仝

追加

◎無花果。（九月）

私しや無花果浮氣に花は咲ねど實意の實を結　千葉香水女

◎蓮の實とぶ。（九月）

月に浮れて迷ふか蓮の實さへ今宵い飛で出る　實山人

◎初嵐。（仝）

初の世帶を妬んで吹かつよい當りの初あらし　陸中竹亭幽升

◎花野。（三秋を兼る）

錦着て居た勤をひいて越すも身に咲く花野原　實山人

◎薑。（仝）

添た手わざにする梅漬の薑も嬉しい色に出る　仝

◎鮒釣り。（仝）

ふるへ附程嬉しい鮒の來さうな手答した今宵　仝

◎初汐。（八月十五日）

かもひ月夜による初汐の引は返さぬ意地で來　仝

◎八朔。（仝）

心しづかに逢八朔の首尾もめで度世のためし　仝

◎二百十日。（七月）

主に怖〻逢ふたも丁度二百十日のあれの晩　横濱丸山萬

◎辨慶艸。（三秋を兼る）

辨慶艸をば貿さへうれし一度戀してこの世帶　鶴亭金升

◎蛇穴に入る。（八月）

蛇の道や蛇だヨいつしか漏て穴へ入度此浮名　仝

◎木賊刈。（八月）

深いまよひは國原山につきぬ根ざしの木賊刈　仝

◎唐黍。　唐もろこし○（仝）

やけゞ燒はゞ唐もろこしの豆の粒はゞ有怨み　仝

◎龍膽。りんどう○えやみ艸○思ひ艸○（仝）

眼にいつかぬゞ俺龍膽の花も實も有胸のうち　仝

◎零余子。（三秋を兼る）

曳れて笑顔のこぼるゝ零餘子實の入話の行掛　仝

◎白粉の花。（仝）

外見を楽たる世帶の庭に白粉てふ名の花が咲　仝

◎落穂。（仝）

言度事さへ何處やら落穂是も嬉しき余りから　仝

◎老母草の實。（九月）

儘になる實も萬代迄と祝ふ萬年青の葉の榮へ　仝

◎若烟艸。（三秋を兼る）

今は互ひにまだ若烟艸身を粉にしてなと添積　仝

◎竹の春。（八月）

外の苦勞も空吹風とつくすこゝろのたけの春　仝

◎太刀の魚。（仝）

網の目よりも多いい人目もれて無き名か鱭魚　仝

◎茘支。　一名瀬葡萄○（仝）

出たり入たり愚痴ゆふ垣根見ば茨枝も笑ひ顔　仝

◎乙鳥歸る。（仝）

姿かはりし柳を棄て歸るいつれおいつばくらめ　仝

◎虫送り。（七月）

鐘や太鼓ぢや探せぬ主についで悔しい虫送り　仝

◎椋鳥。（八月）

田舍育ちも塒を定だめすめばみやこの椋の鳥　仝

◎鶉。片―○馳―○―鷹○―衣○―の床○（三秋を兼る）

百夜通ひし名の深艸の野にも有かよ片うづら　仝

（片鶉）夫婦相添はずはなれて居るをいふ

籠を住居の苦界の鶉にくい羽出が身をせめる　仝

◎梅嫌。（八月）

赤い心の數々見えてすがたうつくし梅もどき　仝

◎裏枯。（九月）

なびく艸葉も早裏枯て今日い實意の色がつく　仝

おもてに飾つた浮氣の色もさめて實の裏枯野　仝

◎胡桃。（九月）

かたく見せても心のうちを割は味もつ彼胡桃　仝

◎茱萸。（仝）

時が來りやこそ色づく茱萸の誰が見付て初契　仝

◎炙花。（七月）

口で蔓艸浮氣なぬしにすべて遣り度やいと花　仝

◎木芙蓉。（八月）

雨にあふたる木芙蓉の花の誰も迷はす立ち姿　仝

◎佛手柑。（九月）

握る手に似た佛手柑見るも可笑し二人で植木市　仝

◎秋の野。（三秋を兼る）

迷ふた水さへいつしか逃て秋の野末の物哀れ　仝

◎秋の水。（仝）

一日〳〵に思ひもましてつゝみ切ないあきの水　仝

松の葉や
細きにも
似ず
秋の聲
風國

すまぬ作らも怨みは深く先へ押しゆく秋の水　仝

◎秋の聲。（仝）

ぱつと溜め呼吸つくづ〜聞ば庭の木々さへ秋聲　仝

◎秋の山。（仝）

書にもかゝれぬ心の色を夫とくらべん秋の山　仝

◎秋の川。（仝）

花に首尾した舟さへ今日は淋うつないだ秋川　仝

汚れ次第に苦の嵩ましていつが消のか秋の川　仝

◎蘆の花。（八月）

首尾の夕暮雪かと思ふ風に穂がちるあしの花　仝

◎行秋。（九月）

わかれ行秋流石にかおし袖にかたみの露の玉　仝

うき目三月もいや昨日今日思案斗りに暮の秋　仝

◎猿酒。（三秋を兼る）

山の奥でも氣が合酌に他人交ずを木の實さけ　故家職齊鬼〆

◎柘榴。（八月）

多い苦の身を包で笑も流石柘榴のすねの果　鶯亭金升

（子澤山元魏安德王延宗李祖收を納て妃とす後に帝李が宅に幸あり

し時妃が母二の柘榴を帝の前に荐む人其意をしらず祖收が曰く子

孫多からん事を欲すト

（鬼子母神）に柘榴を備ふるは子の多き義をとるあり

◎北野煤拂。（七月七日）

やつと通ふて北野の神社邪魔はさつぱり掃煤　仝

◎金柑。　金橘○（九月）

剝て鳴した子の金柑に座敷勤めた日をおもふ　仝

◎蚯蚓なく。　蹶女○（三秋を兼る）

うたふ蚯蚓のふしさへ悲し待て居人ふまぬ門　仝

◎水引の花。（八月）

いのち遣との心で來たか水引てふ花添えた文　詠み人しらず

◎秋海棠。（七月）

すゐと知てか秋海棠の花の夜霜にやどる蝶　鶯亭金升

◎松露。（九月）

にくい男松の根を堀立て浮氣お松露を見附出　仝

◎四十雀。（仝）

五月蠅啼き立言のぢや無が主の浮氣は四十雀　○

◎鵙。—の草莖○—落○（三秋を兼る）

誰がやみ路に斯迷はせて涙も出かねる眼縫鵙　仝

想にかけては眠のあい鵙の先が見あい苦勞爲　仝

鵙に問ましその草莖がおもふお方のすむ道か　仝

◎桃の子。（七月）

（喰餘の桃）衛の君彌子瑕を寵する事甚し或時彌子瑕君と果園に遊び

桃を喰しに甘かりしかば己の喰欠を奉る君大いに忠ありとし譽られしが寵衰ふる後此事をも罪のうちに數へられて遂に誅せらる（桃を盗む）西王母が桃千年に一度實る是を喰へば千歳の齢を保つ東方朔是を三つ盗みて喰ひしといふ

（三桃三子を殺す）齊の景公の臣公孫捷田開疆古冶子勇ありて禮おし宰相晏子謀りて二つの桃を贈り其功に依て喰と命ず公孫捷虎を打し事を言出て功あるは我おりとて喰ぬ田開疆出て三軍の多勢を退けたる事を説誇るに古冶氏は川中にて黿を殺せし事を言ひ我に勝る勇なしといふ孫捷聞て先に喰しを耻て自殺す開疆も又殘れる桃を讓りて自殺す古冶氏見て我一人死せざるは不仁ありと又自害す云々

以上

うき目三年のその辛防も屆て女夫になつた桃　仝

（十月）

あらはして木の葉の後のしくれ月冬のはしめに何をそめまし

定家

草も木も初霜月の朝ばらけながめも白き人のをちかた

長明

（十一月）

くもりつゝ空のしるしに雪見月今朝こそ冬のなかめありけれ

有家

しらにぎてよもの宮居の神樂月たつ榊葉の菅のさやけき

定家

◎冬

十月

陽月○良月○上冬○玄冬○秦正○初冬○時雨月○初霜月○神無月○（神無月は雷無月といふ事なりといふ）

十一月

黄鍾○大雪○仲冬○周正○復月○暢月○雪見月○辜月○天正月○神樂月○霜降月○

十二月

大呂○小寒○大寒○季冬○臘月○除月○段正○凋年○急景○窮月○霜蟾○弟月○春待月○梅初月○三冬月○

ろの部

◎爐開。

爐○炭握○（爐開は初冬なり）

風さむみ霜ふり月の空よりや雪けさみえて降りそむらん。（十二月）

はれてゆく年は身にうふ老なれど春待月のいろがしき　長明

花はまだつぼむ枝かさほのみえて梅はつ月のこゝろいろめく　顕照

ゆたかなるさきぞと見えて三冬月いろかにつもる雪ののさけさ

うれしく開く○開く眉○開く胸○釜の音きく○ぬしを松風○手前めづらし○籠り居○獨たのしむ○互ひにたのしむ○寄りそう○のぞくの○おこる炭○つり釜○自在鍵○かける鍋○折り焚く柴○いぶる炭○田舎家の爐○圍爐裏○すはる炭櫃○ふゐい中○動かぬ○人をいつ迄主や釣釜の上たり下たり爐の手前　下谷梅升

他人入ずでする爐開きに掛るも隔があられ釜　詠み人しらず

都いなれ家爐に柴くべてあたり搆いぬ差向ひ　仝

はの部

◎初雪。（雪の條に出すべし）

◎初霜。（霜の條に出すべし）

◎初時雨。（時雨の條に出すべし）

◎初氷。（氷の條に出すべし）

◎春を待つ。（十二月）

近い春○心待ち○やかて春○春の心づく○忙しい中にも○添るゝ春○顔見る春○逢れる—○只樂しみに○つらい師走をしのぐ○迎へる○押し通す○日をくらす○いつしか暮て○主をたのみて○心だのみに○

いつも樂い世帯の一間今日は子供が春をまつ　佐賀の家

苦勞師走を越す間も長い待が花らし春の首尾　寶廻山人

雪に包れ苦にあく鳥の晴て飛るゝはるを待つ　仝

との部

◎酉の市。　—の町○（十一月酉の日）

初酉○二の—○三の—○熊手買ふ○芋がしらを買ふ○切餅買ふ○酉から廻る○廓の門が明く○掻き込む○縁起がいゝ○人に押れる○戌の日まで流連○福を祈る○こゝろを熊手○熊手の簪○入谷田甫○四谷通り○戻が淋しい○くれて詣る○蓑錢の雨○

（一夜の契酉の町には芳原の三方の門皆ひらく　刎橋や酉一日のあまの川　香以山人

朝はうらみしとりてふ市も今宵渡に橋の首尾　寶廼山人

◎年忘れ。　忘年會○（年中の勞を忘るゝ意）（十二月）

ぬしと年忘れ○手酌で——○忘れられぬ事○忘れたい事○忘れてうれしゝ年○つらい事○浮名の今年○せかれた年○醉て忘る○愚痴の埃も浮氣の塵もはらふて互ひに年忘れ　乙空山人

思ひ出す種又こしらへて今宵二人が年わすれ　靜夢

◎年の市。

羽子板買ふ○買てもらふ○買にゆく○鞠を買ふ○世帶道具を買ふ○まけた〳〵ト○手を打つ○威勢がいゝ○春のもの○—の心地○世帶めく○今年から買初め○明て見たい○春にしたい○添れる年○ひかれる年○請出される年○たつ市○さがる市○込合ふ○押合ふ○入りちがひ○往き返る○出る人○ひれる人○直切る○負る○

心しめ繩上邊を飾人目にやまけたと年のいち　今鵜庵親光

二人うれしくとる年の市世帶道具に眼が移る　熟海好笑

◎歳の暮。○年の終○—の湊○—の坂○—の闕○—の名

（年の終）
古今　あらたまのさしの終になる毎に雪も我身にふりまさりつゝ

在原元方

（年涙なかるゝ）
さゞめばや流れてはやき年涙のよどまぬ水はしがらみもなし

道助親王

（歳の末）
はる〳〵とおもひし年の末の松老の涙こらやすくこえけれ

領子内親王

殘○—の冬○—の果○—みつ○—涙あがるゝ○—
籠○—の末○

くるゝ年○わづかに成る○春を隔つ○止めたい○今少し置きたい○とゞめ難き○惜まれる○押つまる○うれゝく暮てゆく○今年も今日○もう昨日今日○指を折る○片手に足ぬ○支度もせぬ○支度が出來たのうれしい寐覺め○心急く○氣忙しい○人目の關○越しあやむ○年の坂をのぼる○名殘になる○立年をたのむ○くる春をたよりに思ふ○心沈む○心浮き立つ○そゞろ立つ○思ひやる○晴て越す○無事にかくる○主を道づれ○主のあとから越す○胸に思案も斯う押しつまり越ぬ人目の年の關　寶山人

年の關所に見張があらば怪い二人は通すまい　仝

浮たこゝろも錨をおろす年の港のかゝり舟　仝

ちの部

◎千鳥。　村千鳥○浦千鳥○磯千鳥○川千鳥○島千鳥○濱千鳥○友千鳥○小夜千鳥○夕波千鳥○

ないて友を呼ぶ○あき明す○浮名がパッと立つ○一つに寄る○情の浦千鳥○心の友——○手管にはま千鳥○月にうかるゝ○波にもまるゝ○遠く鳴海○近くへ寄る○苫家のけふり○磯馴松○千鳥が驚ぐ○——に驚く○——の友呼ぶ聲○——がむれる○——が一つくる○——がつれ立つ○沖の白帆○島の舟○

（汐の滿干）太田道灌鳴海の濱にて敵を追ふ士卒汐時をあやしみしに道灌古歌に

遠くあり近く鳴海の濱千鳥汐の滿干ゝ聲にこそよれ

トあれば千鳥の聲にて知ぬ可しとて敵を討ちぬ　姫路心亭

いく夜寐覺の思もまして磯の千鳥の島がよひ　空々家瓢輕

すねて雲間に隱れた月をないて呼立小夜千鳥　下手横好

通ふ千鳥の道さへ絶ていく夜お前にあは路島　待里庵

ふかく鳴海と上邊は見せて口と心のうら千鳥　松廼家梅河

通ふ契もよい引汐と遠くあるみの小夜千鳥　鶯亭金升

遠ざかつても又寄汐にふかく鳴海のはま千鳥

ぬの部

◎暖め鳥。隼○（三秋を兼る）

情のたけ○あたゝめる○手のうちの玉○怖くうれしい○一人皺める

○塒こひしい○明て歸す○はなして遣る○すくんで居る○主に身を

まかす○心をよせる○まゝに成る○斯うあるからは○飛で行たい○

つらい身の上○引きとめる○放さぬ氣○義理をたてる○氣が隼○

今宵一夜ゝ逃しはしない寒さ知ずのぬくめ鳥　寶山人

なの部

◎落葉。　木の葉○落葉搖く○

ちる木の葉○ふいと落葉○かたるに——○穴に——○落てさびしい

○落て果敢無い○雨と降る○かさある○月の木の葉○雨の——○

搖きたてる○掃きよせる○肩にあたる○窓から遣入る○袂から出る

○ふるふ襟○踏みつける○水をせき止る○せかるゝ水○下流れ○ぬ

（鴛鴦の劔羽）
池にすむ鴛の劔羽
そばだてゝつまあ
らうひのけしきば
むかも
（仝恵ひ羽）
霜もらぬをしの衾
の思ひ羽も千世を
かさねる宿の池水
（仝悲）
こやの池つがはぬ
鴛の一つがひ離ぬ
ぐ沓のかたちなる
らん

かり道○坂道○笠の上○山の奥○庭の隅○熊手にかゝる○箒にかゝる○塵にまとる○

花とさかした昔にかへて山家世帯の落落掻き　鷹の家

雨と昨夜いだました落葉歸る道をばうめる朝　寶廼山人

添て庭はく箒の先に舞ふて落葉もなぶるやう　仝

◎鴛鴦。

――の劔羽○――の思羽○――の沓○――の衾○――の褥○――の褥○

外目に羨ましい○はあれぬ思ひ○一つに寄る○波風たゝぬ中○深くかたらふ○淺からぬ縁し○浮いてくらす○比翼の契り○書を見てうらやむ○塵にへだつる○わかれが鴛○歸すも――○わたしを劔羽○ふかく思ひ羽○衾をあがめる○つれ立つ○寄り添ふ○

むつむ鴛鴦めが是見よがしに遊ぶも妬し歸朝　仝

◎大晦日。　おはつごもり○掛乞ひ○掛取り○借金取○

今日ぎり○今年も果る○忙しい身○醤麥をくふ○花いける○茶をたてる○あした待るゝ○寐ずにゐる○明るが樂しみ○暮るも惜しい○掛取りの鬼○心にかけ乞○言ひ譯するのばすもつらい○取ねばゆらぬ○留守つかふ○突きとめる○口舌の掛○約束の貸し○來年を心あてに○くる春をまつ○催促がつらい○やり返す○いためつける○かへる〳〵を氣に掛取りの私や案ドで居ざい促　仝

今年狀した其約束の貸しも取たいおはみそか　仝

鬼に見れりや攻苦が怖い竊と首尾する大晦日　養老舍瀧音

かの部

◎神送り。（十月一日）

◎神の留守。（十月）

◎神の旅。（仝）

◎神迎へ。（仝）

（出雲の大社へ縁結ひの爲諸の神達集りたまふとい
ふ）

神の骨折り○すゐな神○御留守へ願ふ○樂しく送る○お歸りを待つ
○今朝迎へた○傍聽たい○お供をしたい○主と結ばる○浮氣は言ぬ
○言ふも耻かし○聞く便がない○留守が淋しい○留守の物思ひ○戀
の神○八百萬の——○たのもしい——○先へ結ぶ○結んで欲し○通ふ神
○

（あぢむら）
さぢうむる氷をいかにいとふらんあぢむら渡る諏訪の湖　西行

縁をむすんだ神さへお留守今宵忍で千話口舌　春駒家すゝ丸
そふて留守居の神さへ祭る結ばせ給し神無月　光姿軟史

◎歸り花。　歸り咲き○（十月）

花に歸る○愚に歸る○むかしに歸る○元の名に歸る○ふいと眼につく○見つけてうれし○仇にいちらぬ○
おもゝず萎るゝ氣を取直し米練殘さで歸り花　下手横好
うれしい思もわづかの問今來たばかりで歸花　金亭光升
小春と言れた浮世をのいて元の名前に歸り咲　鶯亭金升

◎鴨。　あぢむら○（みの部水鳥の條に出す）

◎寒聲。（寒習ひ）○

星よ起る○くらいうち○冷い手○氷ふみ割る○聲張りあげる○戀の

手習ひ○ひとり精出す○氣のはげみ○身だしなみ○寐衣のまゝ○明る夜苦にする二人に替て何處の子供歟寒浚　仝

たの部

◎玉の塵。（雪をいふあり。ゆの部）

◎垂氷。（つの部つらゝの條にあり）

◎炭團。（すの部炭の部）

◎足袋。　革足袋○花――○（三冬を兼る）

結ぶ紐○こはぜ掛け○足袋あらぶ○干す○――の砂○――をさす○――の穴○――の看板○――の形○主が紺足袋○いつ絹足袋と○まゝの革――○何うとも白――○大きな足○糸瓜の皮○足袋ぬぐ日和○垣に干す○樣につるす○

命といふ字を入たる針で今日は嬉く足袋を繼　詠人しらす

昔來るかと覗いた垣へ添て足袋をば干た今日　實山人

◎短日。　日短○

あへば猶さら日が短かさに招扇のあらば欲し　仝

戈でまねいたためしも有と樣で短い日を恨む　仝

◎大根引。（三冬を兼る）

引手あまた○折てわびしい○ぐつと引く○折れこむ○引きためらふ○引く心○土のまゝ○泥にすむ身○心を練馬○氣をひく大根○山の畑○

おもふ心がもし折たかと先の氣バかり引大根　仝

此頃足をば引たる大根中折れすると云憎しい　仝

◎鷹狩。

鷹匠○追鳥狩○鳥叫び○偷起鳥○をしへ艸○落草○ちから艸○列卒繩○狩杖○―塲○鷹の鈴○

（仝）

追ひ出す○追ひまわす○折を獲物○そつと立つ○忍んで取る○つけ覗ふ○のがれ難あい身○ぬしを力草○草をたよりに○草に忍ぶ○犬を入れる○何處へかそれる○狩りつゝく○有處をさぐる○行方を慕ふ○忍び足○つゝめど漏る○かぎ出されて○仕方あく立つ○抱へらるゝ○取れてあく○忍ぶ甲斐あい○何うおる鈴○証據とある鈴○夫を見つけて飛びたつ鷹の首尾に心も空の鶴　仝

止りや逃さぬ意氣張づくにつかひ袂の力ぐさ　仝

犬を入れても探らにや置ぬ噂鷹野のかくれ塲所　仝

人目しのんで偷立鳥の高飛あらない草がくれ　仝

◎鷄卵酒。（仝）

きみを醉す○寒さをしのぐ○癪の虫押へにする○主にすゝめる○あたためて待つ○あま口○かき廻す○煮えたつ○逢ふも鷄卵○かへる色○ぬくまる○雪もしらぬ○寒さわすれる○降るものを聞く○雪に通ふた實意の胸へしみ〳〵嬉しい玉子ざけ　虹亭仙升

鳥い怨めど今宵い主とわけて樂しひたま子酒　詠み人しらす

きみに實意ですゝめる酒い後せ樣との寒卵　仝

つの部

眼ばかりを氣儘頭巾のうき世かな　共角

◎氷柱。　垂氷○(仝)

軒の氷柱○垣の——○梢の——○岩の——○筧の——○傘に折る丶○指のやふ○簾のやふ○わたしを氷柱○涙の垂氷○むすぼる丶胸○中絶える○旭にとける○針となる○氷柱喰ふ○盆にのせる○

怖さこらへて忍んだ顔を軒の氷柱が指をさす　長崎邊人

悠氣して待戸口にぬしの傘で氷柱の角も折る　鶯亭金升

(この部氷の條照し見るべし)

◎頭巾。　袖——○御高祖——○きま丶——○きぶくー——○丸——○すみ——○(仝)

眼ばかり出す○顔ちがひ○かくす顔○しのぶ身○つ丶む浮名○人目をいとふ○傍を氣づかふ○中さへ丸頭巾○たゝむ——○かくす——○——へ錠○——をもれる○——に染み○——を脱ぐ○

途中で出逢て眼と眼の話頭巾漏てる笑ひがは　鶯亭金升

寒風しのぐと人目ゐや見てゐ高祖頭巾で忍顔　華の家梧雨

◎月の氷。(さやかなる事あり)

◎月冴る。(共に冬の月の條にあり)

(月の氷)
いひしらず夜半のあらしのさえぬば水なき空も氷ぬれ月影　知家

ねの部

◎葱。　根ぶか○一文字○(三冬を兼る)

洗ひ葱○きざみ——○五分〳〵○眼に玄みる○にくい一文字○葱畑○——鍋○——ぬた○——とト○匂ふ○白根○枯れ葉吹く○

添て仕舞ばかとなし川に汚た足をばあらひ葱　寶山人

馴ぬ勝手に刻んだ葱がぬしを外見の眼に染る　仝

なの部

◎生海鼠。　金海鼠○とうこ○(仝)

眼鼻がつかぬ○ぬらくら暮す○歯にあはぬ○ッルリと辷る○生海鼠に藪○――の様○酢――○手をぬける○切りかねる○嚙しめる○

早く好身におり度願首尾の夜酢生海鼠喰に付　仝

此處と押へる證据もぬしはうまく言拔爲生海鼠　仝

◎納豆汁。(仝)

苞納豆○納豆賣り○糸をひく○朝飯の菜○寺から來る○芥子がきく○たゝく○打つ○よく馴る○好き嫌ひ○

かへす朝の飾らぬお菜納豆も未練の糸をひく　仝

別れ惜んだ窓から今日は納豆呼でるしん世帶　仝

◎鍋燒。　貝燒○

◎鍋燒溫飩。

二人で取る箸○鴨の味○火鉢を離てる○夜更の樂み○今寢る腹○蕎麥賣りが寢す○眼を覺させた○またせた貝燒○人しれぬ味○おとし玉子○氣を寄せ鍋○煮るれと○吹てぼれる○

寒さ外なる樂しみ鍋に汁より嬉しさ溢れ出る　仝

鍋燒き溫飩が來て居るばかり待夜胸さへ煮門　仝

むの部

◎六の花。（雪の事あり。ゆの部にあり）

◎室の梅。（ふの部冬の梅の條へ出す）

うの部

◎鶯の子。（さの部さゝ鳴の條に出す）

◎浮寢鳥。（みの部水鳥の條にあり）

◎薄氷。（この部氷の條にあり）

◎埋火。（すの部炭の條にあり）

くの部

◎懷爐。　湯湯婆○温石○（三冬を兼る）

包む○入る○暖まる○内懷中○腹へおしつける○やく温石○鹽温石○懷爐におつて○手をさし込む○手を暖める○

癪も顔見りやいつしか治り懷爐の手前も耻敷　仝

今迄入たる其温石も仇にすておくまくらもと　仝

やの部

◎山眠る。（仝）

蒲團着た形○寐る山○山も眠るに○さめぬ色○ぼんやりと○寢ぬ鳥○島の山○山又山○まだ眠がさめぬ○寢入りばな○のぼる朝日もしらずに眠る蒲團着たよな東山　西京　夢窓

ふの部

◎冬牡丹。（十月）

時あらぬ色○咲いてめづらし○つそり咲く○寒くも咲く○一花咲せる○霜枯れ時○日蔭にあはれ○賑にある○人ふや夫とも知さぬ懸は時節まつ身の冬牡丹　安西　樂史

冬の牡丹と身は圍はれて開きかねたる胸の内　横濱　靜夢

むしろ着たとて笑ば笑へ一度は世に出冬牡丹　桐の家　一葉

◎蒲團。　座――○貸――○損料――○（左に出す）

◎衾。　古さ――○厚――○敷――○小――○紙――○

夢をのせる○寐返りをする○脊中向ける○片寐する○蒲團に余る夢○外へ出る○鴛の衾○ふたり――○主と――○獨かた敷く○うつゝに探る○抱へて咖つ○寐足ぬ夢○寐飽る一人○待ち草臥○晴て衾○風がくる○寒さしのぐ○足だけ寒い○ちゞまる○寐る樂○引き寄る○歸す朝日に干す蒲團さへ怨むか影て見える樣　詠み人しらす

さますも惜いと蒲團に二度寐主が殘した其暖　濱町　逸人

主を送りて戻りし蒲團寐ても續かぬ夢のあと　寶山　人

（冬籠）
古今　雪ふれば冬ごもりせる草も木も春にしられぬ花ぞ咲きける

こめし移り香捨るも惜く仇に月日を古ぶすま　仝
紙の衾に起き伏す程の世帯もつとも切られぬ　仝

◎河豚魚。　河豚汁○腹立喉○（三冬を兼る）

腹に毒もつ○覺悟してかゝる○わるい仲間○骨見ても怖し○迷はせる味○ふくれ顔○口がこわい○睨む○一口ものに頬をやく○
添へゞ大事の命と知ず河豚を買とて肴賣り　鷲亭金升

◎冬籠。　（仝）

世へ出ぬ○世間わすれる○主と二人で○圍はれた身○湯治にゆく○
文を友○顔出しせぬ○浮名に攻られ○つらい体○
すき間漏灯を苦にせぬ中も風に氣を置く冬籠　寶山人
浮世はなれてうれしや二人馴ぬ手業の冬籠居　春曉舍靜夢

あまりうれしさ言葉も温泉主と熱海へふゆ籠　黛山人

◎冬木立。（仝）

あらいに成る○見え透く心○取り繕はぬ○かざらぬ心○さびしき姿
○やつれ果たる○先を見越す○春に逢ひたい○
花にわかれて斯ある迄に痩たすがたの冬木立　寶山人
白い初霜置き迷いせる今朝は眼につく冬樹立　松本屯水

◎冬の梅。　寒梅○室の梅○（仝）

獄されて咲く○咲くもつらい○開くもつらい○魁る○鉢のまゝ○そ
つと匂ふ○ちらはら開く○たより無き身○風をいとふ○
床へ出されてまだ寒さうに縮む風情の室の梅　木更津芳名齋
待ば待るゝ香を持ながら一夜違ひで室のうめ　安西樂史

影に爲たり日向にあつて梅をかばふも室の實　函館　畊文堂
口說上手にッヒ掛られて咲てくやしい室の梅　（古　人）

◎冬の蠅○冬の蜂○（仝）

すくんで居る○惡まれた身○生のこる○やつれ果る○日向をたのむ○打に打れぬ○今はわびしい○今の姿○越しにくい○やう〳〵過す○添る〳〵日向をたのみに思ふ痩た此身は冬の蠅　寶山人
うつる月日に心の針もとれて年よるふゆの蜂　仝

◎冬の月。月の氷○月冴る○（仝）

手づよくさす○足音が凄い○瞳に怖さるゝ○雲もない○すみ渡る○人影もない○手水の戻り○寐覺がつらい○嫗の化粧○見るもすさまし○星もきらつく○ぞつとする○風が身を切る○鐘が腸に染○

人の苦勞も空吹風とすましきつてるふゆの月　登樂亭小丸
雨戸はと〳〵生かと明りや耻し睨んだ冬のつき　粹多樂史

◎古暦。（十二月）

用あき身○すてらるゝ體○記證も反古○破れた盟ひ○投り出れる○甲斐あい此身○柱に黑ひ○つられて痩る○手もつけぬ○添日數へて手垢とおもや見るもおかしい古暦　伊勢春鶯庵

この部

◎厩。（十月）

木をならす○遠くなる○戸へあたる○雪れろも○ちゝまる○ふるへ

（氷のくさび）
氷来ては田川にたゞる水くるま氷のくさび打うへてけり　爲家

聲○痩るほど○寒られぬ夜○主が木枯し○出來た――○
首尾を妬むか吹く木嵐が主の今來野からくる　在香港　鳥睡
宵の口舌も吹く木嵐も晴りや根の無い朝の空　寶山人

◎氷。　薄氷○厚氷○氷柱○垂氷○銀竹○氷花○氷面鏡
○氷のくさび○――の聲○――の衣○氷面鏡○（三冬を兼る）

とけぬ思ひ○波だゝぬ○割ていふ○張りつめる○情薄氷○晴れてとける○踊訪の氷○池の――○海の――○手水鉢の――○川の――○堀の――○沼の――○わたり初め○氷の下の人（結ぶの神）○氷の上の鯉○木の葉をとぢる○豆腐を氷らす○圍ふ氷○氷の瓣○（鯉を獲）晉の王祥繼母に使へて孝あり母冬の日生魚を喰し度といふ然ゞ天寒く水氷りて得難し然ゞ祥是を求めんとして氷の上に乘ければ忽ち氷解て鯉雙尾飛出たりと云

あへば心もとけるゐ主を待夜は氷ととぢる胸　花の家　龍升
宵の雨さへ氷つて今朝はとめるか開ぬ主の傘　鶯亭　金升
どうやら妾をふる井の氷れもひ解ても汲ぬ主　伊勢囀々子
清い心の操をうつしひすゞ赤繩のひもかゞみ　下手横好
そつと忍で逢てる首尾を軒の氷柱が指をさす　長崎邊人
わたる氷のふみつけられて獨苦勞を踊訪の海　物のや

◎火燵。　巨燵樓○置き巨燵○巨燵蒲團○（仝）

さし向ひ○顏を見られる○手がさはる○指相撲取る○うたゝ寐○話に浮れて火を消す○一人まつ○來て直に這入る○文をのせる○まくる○耻かし○巨燵が吉野川○――が邪摩○――が媒○――で五目あらべ○――で瓜彈き○――から水を貰ふ○――へ呼び込ひ○――が二所あく○猫を

入れて三人○月は入れぬ○中よく引合ふ○わかれ〳〵に寐る○風邪ひいた罪○火をほとる○火を起す○買ひもの見る○使ひを上る○八百屋の札持てくる○猫を呼ぶ○犬叱る○向ふ巨燵○さびしい——○待つ夜の——○巨燵の夢○入れる炭○おこす炭○のせる膳○買せる酒○橋にある足○むつきを干す○足袋干す○風がはいる○穴があく○法螺ぬけ○手をさし込む○さし込む足○巨燵してまつ○巨燵は入らぬ○のせたる新聞○時雨の火燵○朝の——○夕べの——○雨きく——○隔ての——○

來ぬと知ねば炭までついで鳥の鳴迄れき火燵　深川物のや

握りかはした巨燵の中の手と手に嬉い汗が湧　春亭霞升

ちから泣く〳〵巨燵にもたれ癪を櫓の隅で押す　東備猫の爪

向ふ巨燵の隔てぬ中は誰に氣をおく穴もない　鶯亭金升

主が歸つた巨燵の穴を寒い風めが來てのぞく　仝

◎木の葉。（落葉の條に出す）

あの部

◎あぢむら。（かの部鴨の條に出す）

◎厚氷。（この部氷の條にあり）

◎霰。玉あられ○（三冬を兼る）

窓をうつ○盆へうける○傘をあらす○たゝかれる○轉げ込む○涙の霰○しばしの間○雪にまじる○雨とまじる○

雨戸たゝけを明おい故か飛で道入た玉あられ　半狂散史

かくす袂の小手指原に今朝はたばしるたま霰　下手横好

あはぬ其夜い心がくもり落る涙のたまあられ　但馬花のや
忍ぶ傘をば邪广するつもりにくい霰の叩く音　長崎臨升
寢ずに出てまつ證據を腦に一つ置度玉あられ　鶯亭金升

さ の 部

◎寒さ。　寒き夜○寒き日○寒き朝○(仝)

縮まつて寢る○寒さも忘れてまつ○來あいで寒さがつのる○寒さに愚痴○心の寒さ○浮名を重ね着○寒い廊下○寒い門○寒さを案ずる○—さを怨む○—をかこつけに寢る○—さを幸いに逢ふ○—さを酒でしのぐ○懷中の寒さ○心の寒さ○寒さ着○二重廻し○二重トンビ○襟卷き○

(火を吐く)葛仙翁客と語る時天大いに寒し仙翁氣を吐く火忽ち口中より出づ座中大いに暖し

(民を愛す)一條の帝寒夜に御衣を脱せ玉ふて曰く天寒し天下の貧しき民寒へたる者あらん朕豈獨衣を襲るに忍びんや　實山人

膝もつめたう覺ゆる寒さ此頃枕に貸さぬので逢ぬ夜毎の寒さにまして苦勞に縮んだ此身體　仝

ゆ の 部

◎雪。　六の花○玉の塵○衾雪○吹雪○—倒○はたれ雪○もち—○かたびら—○つたひら—○粉雪降○小米雪○雪の花○—消し○—しまき○—空○—氣○—催ひ○—の聲○—れこし○—竿○—やけ○—礫

○一打○一轉○一佛○一達磨○一獅子○一女○一の山○一履○一垣○一の肌○

降る雪○降り出す一○つもる一○門の一○山の一○野の一○町の一○朝の一○夜の一○庭の一○木々の一○凪の一○傘の一○軒の一○屋根の一○椽の一○越路の一○雪の空○一催し○一の道○一の朝○一の丈○一明り○一の傘○一の足あと○一の水○一が降り込む○一見酒○一見舟○一の首尾○一の合傘○一の閨○一うち拂ふ○一に似た肌○一に旭の○一に雀の○一に小犬の○待ち兼た雪○寒さも忘れる一○うれしく積る一○解てかたる一○下駄の齒にたまる○踏みて む○除けあふ○こゝろのたけ○思ひの深み○縮む樣に耻し○雪を種に止める○雪に汗かく○うれしく降る○いつか降り止む○深草はぐ通ふ○三度通つた人もある○心が解ぬ○いつか水にある○除けあふ道○足あとを隱されぬ○少しの穴から降り込む○雪に面形捺す○主に當たい雪つぶて○當られ度人○當てやり度○垣越しに打つ○雪竿でも知ぬ心の丈○雪を解して茶にする○雪を握つて枕もとへ置く○雪で兎をつくる○チラ〳〵襟へつめたい○竹がたゝく○邪摩あ竹も聲を立ぬ○連子で見る○手水をこぼせば雪に穴があく○化粧水で雪をとかす○そつと積る話をする○とけて合ふ○

（香爐峯の雪）一條院の皇后或年雪ふりたる後女房達にむかはせ給ひ香爐峯の雪はいかにと仰せられしかば清少納言御前にあり置に座をたちて御前の御簾を捲あげられたり人々才を嘆美す是は白樂天老後に廬山の麓に草堂をむすびて住はれし時の詩に

遺愛寺鐘欹枕聽。　香爐峯雪撥簾看。

トありし故事あり

（興盡て歸る）王子獻山陰に居て雪降し日ふと戴安道を憶ふて舟に乗やう〳〵門迄行て其儘歸れり或人問へば子獻對ていふ興に乗ト て

來り興盡て返ると云々

(雪に書を讀孫康家貧しければ雪の明で書を讀しといふ
(雪中の菌)大和苑田郡の押坂の直といふ人雪中に紫の菌を得て喰し
ければ疾も無く壽長かりしとぞ

鳥も塒をはなれぬ寒さ何で歸さりよ今朝の雪　在米國糠釘家
雪にのこした其足跡も今朝は箒に消すうき名　靜岡乙空
ひるは雪さへ浮氣でとける積はあしは夜の事　滿月居嬬娥
雪へ二の字の後先見ずに神へ添度無理はてふ　大垣頓々
合ぬ齒の根を下駄さへのこす忍軒端の雪の上　玉川笑昨
忍ぶ姿を思はせ振に見せる水蔭のゆきあかり　紅於園錦水
雪にやとめ度歸さにや惡し心二字の下駄の痕　大垣頓々猫史
つもる話も早晩門の雪がかくした下駄のあと　越中一良軒
辛い勤も苦にやせまいもの雪の下にも花が咲　蓬亭烟升

はれて逢れぬ果敢ない戀路文を見のも雪明り　上田嬉笑醒史
闇に忍んだ夜にひき替てはれてお側へ雪明り　神戸鷲枕房
逢に雪道忍んだ事が知れて浮名もたかあし駄　上田壽松翠
悒氣するのも我身の覺え昔とゞめたゆきの朝　春曉舍靜夢
疑り堅まつては岩より堅い雪も解れば只の水　(敌)初春新昇
義理と情の二の字をあとに殘す思の雪の下駄　撫松軒乙空
つもる恨の雪さへ解る主のまことに照されて　伊勢喇々子
苦勞重ね着するのも覺悟知つゝ迷たゆきの肌　竹のやすゞめ
日影住居に身はおちつけど解ぬ思ひの雪達摩　大垣安閑房
解る首尾をばもし悟るとも人に語るな雪達摩　鴨川庵水月
のるか雪車唄いやがる迄も怨み切出す山の薪　下手横好
深く隱して拵へた穴いきつと浮名の圍ひゆき　敷の家初音
積た話の道をもつけず無理にお前はゆきの朝　信陽大町堂

降も厭はずはらふて歸る袖におもひの積る雪　仝
互ひに心のまだ解かねて閨に口せつの積る雪　花のや
雪の達摩も朝日に涙つらいわかれを察してか　鶯亭金升
つらい別れの思ひを積でかへる車も今朝の雪　撫松軒
むねの苦勞に俯向く首もあまる思案の雪の竹　松羅園合中
添はぬむかしの心も今は解てふれかし朝の雪　姫路珍樂
こつそり歸た其足あとをかくす手だての雪佛　虹亭仙升
戀にや初雪たゞチラ〳〵と足ぬところが愛ら敬　光姿軟史
風に傘さへ引とめられて歸りすゝまぬ雪の堤　吟風舍弄月
首尾の笑顔を覗くか雪も傘の下から降こんで　活亭美升
泥足あらふて心も清くうれし二人でゆき見舟　染亭衣升
何といふすべまだ白雪のいつか思ひの積る胸　躑躅園主人
おなじ思ひか犬さへくるふ主を歸ぬ今朝の雪　鶯亭金升

（水鳥）
水鳥の玉藻の床のうき枕ふかき思ひはたれかまされる　匡房

とめるばかりか此初雪をぬしに踏すも惜い朝　仝
雨がした雪三日も降よゞうせ遣ずときめた主　仝

みの部

◎三の花。（霜の異名あり。しの部にあり）

◎水鳥。　浮寐鳥○（三冬を兼る）

池の水鳥○海の――○畫の夢○ならぶ○外眼には苦がおい○月に寐る○浮く度沈む度○足にひま無き○水にさまよふ○水の塵○卿に休む○寐てゐて浮く○出ては沈む○定めなき處○水心○一度に立つ○ひれ遊ぶ○馴れむつむ○主故浮寐○苦界の――○
人の目つまを忍ぶが岡に主と一夜のうき寐鳥　化亭梧柳